書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

批判的マルクス入門

小泉信三

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目次

I

マルクス死後五十年　14
前　文　14
マルクスの人物　17
マルクスとヘーゲル　22
ヘーゲルの世界精神とマルクスの物的生産力　25
マルクシズムと千年王国の信仰　29
唯物史観と世界史の究極目標　32
唯物史観の一面と革命的実践　34
社会主義運動の根拠　37
共産主義必然論　41
マルクスの社会学に対する貢献　42
経済法則の歴史性、非歴史性　47
価値論、余剰価値論　50
資本家的蓄積法則　52
マルクシズム（講義要項）　57
前　言　57
マルクス、エンゲルス年譜　58

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マルクス、エンゲルスの人物　63
マルクシズムの特色概説　64
ヘーゲル　66
フォイエルバッハ　69
フランス社会主義者の影響　71
マルクスと経済学　74
唯物史観と実践　76
『共産党宣言』　78
価値論余剰価値論　79
産業予備軍説　83
販路欠乏説　84
マルクスの価値論余剰価値論に対する批評　86
産業予備軍説批評　94
唯物史観批評　97
結　論　101

マルクシズム　103
マルクスとヘーゲル　103
フォイエルバハ　105
フランス社会主義者の影響　107
ドイッチェ・イデオロギー　112
『共産党宣言』　116

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マルクシズムの成長再説　119
マルクスと経済学　123
『資本論』　128
唯物史観に対する批判　131
マルクスの経済理論批判　136
マルクシズム概観　142
マルクスの国際主義　142
ヘーゲル哲学　143
マルクスとフランス社会主義　145
マルクスと経済学　145
唯物史観と資本主義解剖　146
労働者過剰（産業予備軍）の理論　148
商品過剰の理論　149
資本主義発展の現実　151
価値及び余剰価値理論　153
その批判　155
唯物史観批判（一）　157
唯物史観批判（二）　159
唯物史観と共産主義的帰結　162
共産党宣言の今昔　182

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

前書き　182
共産党宣言　182
革命の必然性　185
プロレタリヤと農民　188
ロシヤにおけるマルクシズム　189
一国社会主義とソヴィエト・ナショナリズム　194
マルクス・レーニン国家学説の修正　198
共産党宣言の今昔　205
［附録］ラッサールとマルクス　210

Ⅱ

価値論上の効用説と費用説　236
搾取理論の根拠　256
搾取論　279
搾取とは何ぞ　279
労働貨幣の実験成績　279
労働価値説の根拠　282
労働費用と需要　283

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

労働の価値と労働需要　285
不用意なる搾取論議　287
労に対する償、功に対する報　289
価値・価格・労働――福田博士記念講演会において――　291
過剰の労働者と過剰の商品　309

Ⅲ

私と社会主義　330

一　330
私とマルクシズム／福田徳三／堺利彦／外遊／社会思想史講義／マルクス価値論論争／価値法則と賃銀／マルクス地代論批判／野呂榮太郎／「マルクシズムと国家」
二　346
『国家と革命』／レーニン解釈の当否／国家死亡論の論拠／暴力革命論／ベルンシュタインの修正主義／その続き／フェビヤン社会主義
三　364
唯物史観及びヘーゲル勉強／唯物史観批判／共産主義必然論／ソヴィエト・ロシヤに対する私の観測／マルクシストの事大主義／官僚軍人層の革新論とマルクシズム／経済計算と経済的官僚政治の問題／階級と民族／民族間の平和、階級間の平和

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

批判的マルクス入門

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、本書は小泉信三の論文選集である。収録論文の選出と配列は本書刊行所がおこなった。書名も本書刊行所が付けたものである。底本には『小泉信三全集』（文藝春秋刊行）を使用した。

一、本書収録の各篇は左記単行本に収録されたものである。収録された単行本名は各篇末尾に記載した。（『マルクス死後五十年』は、一九三三年に改造社刊行の初版、一九三七年に改造社刊行の改訂版、一九四六年に好学社刊行の増訂版、一九五一年に角川書店刊行の文庫版で収録内容に違いがある。本書に収めたものは全て文庫版に含まれている。）

『マルクス死後五十年』
『社会思想史研究』（一九四七年、和木書店刊行）
『共産主義批判の常識』（一九四九年、新潮社刊行）
『私とマルクシズム』（一九五〇年、文藝春秋新社刊行）
『共産主義と人間尊重』（一九五一年、文藝春秋新社刊行）

一、底本は原則的に新字体漢字が使用されているが、まれに旧字体が見られる。これは新字体に置き換えた（人名を除く）。「廿」「卅」は旧字体ではないが便宜的に「二十」「三十」に置き換えた。異体字関係にある漢字は、現今普通に使われているもののほうに統一した（例、翻／飜）。

一、なくともよいと考えられる読み仮名ルビは削除し、望ましいと考えられる読み仮名ルビを付加した。

一、現今一般に漢字表記が避けられるものは平仮名に置き換えた。送り仮名は現今一般の慣例と異なるものもそのまま表記した。

一、著者の元の記述では「カール」のように長音符（音引き）は使用せず「カアル」のように表記されているが、本書では長音符に置き換えて表記した。

一、部分的に全くあるいはほとんど重複する記述がある場合があるが、中略せずにそのまま掲載した。

一、二行割の行内挿入注は本書刊行所によるものである。

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マルクス死後五十年

前文

マルクスが死んだのは一八八三年三月十四日のことであるから今年（昭和八年）三月は正にその歿後五十年に相当する。この機会にこの五十年を回顧して、マルクス及びマルクシズムについて若干の所感を述べたいと思う。

私はマルクス心酔者ではないし、また、度々の機会に彼れに対する反対批評を試みた。しかし今日吾々同様もしくはそれ以下の年輩の文筆者でマルクスを知らず、また全くその影響を感じないという者はあり得ないはずだと思う。私はかつて拙著の小経済思想史中にマルクスのことを述べたところで大体左のように書いた。

まことにマルクシズムには許多（あまた）の誇張偏頗（へんぱ）独断矛盾が蔵せられており、これを指摘することはまた必ずしも難事ではない。しかしこれ等の欠点あるに拘らず、予言者的直覚と革命家的情熱と透徹せる異常の推理力とによって、そうしてこれに加うるに精励無比なる文献渉猟に基づいて書かれた『資本論』は、恐らく十九世紀後半における経済学に対する最大の貢献をもって許すべきものであろう。マルクシズムは十九世紀末葉に至って、ドイツ、フランス、イギリス、ロシヤ等における社会党の綱領に採用せられ、二十世紀に入ってからは、ロシヤ革命の指導理論となり、また一部分はその学問的価値自体のため、一部分はこれ等の実践的影響のために、現代における社会科学の研究に対する最大の刺戟者となった。云々。

また別の機会には書いた。概して独創多き著者は多く読書せず、多く読書するものは独創を欠くのが常であるのに、マルクスにあっては珍しくもこの両者が充分の程度に兼ね備わっていると。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

右はいずれもマルクシストでない者にも同意される点であろうと思う。

マルクシズムの現代にとっての意義はこの通りであるが、しかしマルクシズムが理解されるまでには割合に時を要した。『共産党宣言』の後約三十年、『資本論』公刊の後約十年の一八七五年に、肝心のドイツ社会党がゴータ綱領の如きマルクシズムに理解を欠いた綱領を決定採用した一事だけでもその消息をば窺うことが出来る。ドイツ社会党員中かなり多数の者は始めはラッサールの指導に従い、後にはオイゲン・デューリンクのマルクス批評にも耳を傾けた。エンゲルスがかの「反デューリンク論」を党の機関紙『フォアヴェルツ』に連載し始めた時には、党内にエンゲルス攻撃の声が起り、その寄稿の続載を禁止すべしという決議案が僅かのところで通過しそうな勢いであった。それがようやく或る人の提案で、これを『フォアヴェルツ』本紙でなく、その特別附録に連載することにして問題が片附いたということである。今日の状態と比較すれば誠に隔世の感がある。

マルクスにとっては、エンゲルス及びごく少数の者以外にはかくその本国においてすらその理解者を見出し得ないということはよほど不愉快であったろうと想像される。彼れは実践運動者として不成功に終ったのみならず、思想家としても、その生前においては不遇の人であった。彼れがブラッケその他宛ての回状中に、ゴータ綱領案を逐条的に小意地悪く批評した不機嫌な語調は、この不愉快から説明されるものであろう。それだから偶々『資本論』の理解者を見出すことは、マルクスにとっては非常な満足であったらしい。一時彼れがフォン・シュヴァイツェルに好意を示したのもそのためではなかったかと想像される。

シュヴァイツェルはマルクス、エンゲルスが秘かに敵視したラッサールの後継者であって、その親ビスマルク政策は無論マルクスの許し得ぬものであったのみならず、マルクスの指示に対して、理論上の教えは有難く拝聴するが、運動戦術上の指図は受けぬ、「時々の党略の実際問題については、予は貴下がこれ等の事物に判断を下さんがためには、運動の中心にいなければならぬことを一考せられんことを乞う」（云うまでもなくマルクスは当時ロンドンにいた）という無遠慮な答えをしてマルクスを怒らせた人物である。しかし彼れの理論把握の能力は当時の多くの社会主義者、殊にマルクスの弟子リープクネヒト等に比較して遙かに卓越していたものと見え、その後一八六八年になって

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『資本論』に対して極めて理解ある評論を試みた。その後間もなくマルクスはシュヴァイツェルに与えた手紙にこう書いた。「予は貴下が労働者運動上に発揮せらるる才智と気力とを無条件に承認する。予は予のこの意見を友人の誰れに向っても匿したことがない。予が公けに発言しなければならぬ場合には――国際労働者協会総務委員会において、また当地の共産主義者協会において――常に貴下をわが党の士として取り扱い、未だかつて貴下との意見の相違点について言葉を漏らしたことがない」と（一八六八年十月十三日附）。これは容易に人に許さぬマルクスとしてはよほど愛嬌の好い文言である。

シュヴァイツェルの『資本論』評論についてはマルクスはそのエンゲルスに与えた一八六八年三月二十三日附の手紙の中に「同時にシュヴァイツェルを送る。読んだらどうか返送してくれ給え。……シュヴァイツェルの附帯動機は何であろうとも、一つ彼れに許さなければならぬことがある。そこここで間違いを犯してはいるものの、とにかく彼れはこの問題を骨折って勉強している、そうして何処に重点があるかを承知している」と書いてシュヴァイツェルの才能を認めている。（マルクス・エンゲルス往復書簡集のベルンシュタイン版には索引に、「資本論の理解」と題して上記の一節を指示している。然るにリャザノフ版の索引にはこれを掲記せぬのみならず、緒言の中にマルクスがシュヴァイツェルの才能を認めたと書くことを好まぬらしい語気を漏らしている。）

マルクスはこの通り始めは容易に理解されなかったものである。マルクスは難解とされている。私は必ずしもそれに賛成しない。難解難解と称せらるるために、かなり正常平明の解釈が妨げられたと思う。読者の側で素直に納得できないことでも、何か深遠な理窟があるのだろうと、考え過ぎて凝り過ぎて、独り相撲に類する解釈を下した例が従来かなりあったと思う。しかしいずれにしても『資本論』その他の著作が、その結構及び用語の上から見て決して平易な本でないことは勿論である。その理解に年月を要したのも無理ではない。而して潜心熟読してようやくその真髄を摑み得たと信ずる者は、先ずその祖述と弁明とに力を注ぐのが当然の順序である。マルクスの死後五十年間における大多数マルクシストの事業は、この祖述と弁明とに終始し、少数の例外を除けば未だマルクスから出発しながら忌憚なくマルクスを批評し、その欠陥、不備、誇張、矛盾を指摘して大胆に自家の見解を述べるところにまで到達して

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

いない。反マルクシストは別として、マルクス主義者側からのマルクス批評は、彼れの死後五十年の今日以後に期待さるべきである。

マルクスの人物

色々の問題に触れるが、先ずマルクスの人物について述べる。

マルクスの書簡、著述及び人々の記述を読むと、彼れは大体において、敢えて人民を愛さぬではないが、それよりも強く圧制者を憎むという側の人物であったように見受けられる。私はかつて彼れの人物を評して、その孝子たり、良き夫たり、慈愛深き父たる一面と、その敵に対して辛辣毒悪厭うべく憎むべき一面とが著しい対照をなしていると書いたことがある。その後フォアレンダーの『マルクス伝』（K. Vorländer, *Karl Marx, Sein Leben und sein Werk*, 1929, S. 6, 67.）を見ると、父の死後、婚約、職業の選択、財産分配等の問題について彼れは母親と不和になり、遂に全く和解するには至らなかったようであるが、しかし全体において、家庭の人としては彼れは良き父であり、夫であった。その書簡集を見ると彼れがその子供のことを心配して書いている個処などは、ほとんど可憐と評しても好いくらいの真情を示している。

然るに、そのマルクスが一たび家庭外の世間に出て、殊にその敵対者に面すると全く別人の趣を呈し、嘲罵、当てこすり、あらゆる手段をもって毒焰を吹きかけたことは、誰れしも承知している通りである。ただ敵対者の攻撃に猛烈だったばかりでなく、彼れは愛する人が少なく憎む人が多い人物であった。彼れはかつて親しく交った者と大概後には相背き、エンゲルスその他二三を除けば、彼れと交誼の終りを全うした者がない。無論マルクス側としては言い分があるに相違ないが、彼れが我執に強く、情誼や局量に欠ける点があったと見ることも正当であろう。彼れがエンゲルスの妻の訃音に接して、簡単に一二行の弔辞を述べた直ぐその後に、長々と自家の窮乏を訴えて金策を依頼し、流石のエンゲルスを怒らしたのは（一八六三年一月八日、十三日、二十四日附書簡）無論一場の過失に相違ないが、しかしまた彼れのデリカシーを欠いたエゴイストの一面を示したものと評されても致し方あるまい。

SAMPLE
Shoshin-Sinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

バクーニンやラッサールは、これは元来マルクスの親友ではない。また彼等に対するマルクスの非難には、第三者から見ても充分の道理がある。しかし彼等に対するマルクスの態度や処置は、一々皆な公正を失わぬものだったとは考えられない。この点マルクス伝の権威者間に意見の相違があって、フランツ・メーリンクが割合にバ、ラ、二人に対して寛大であるに対し、リャザノフは一々マルクスが正しくて相手が不当であるという立場から見ているが（前記の妻の死亡を通知した返事に金の無心を持ち込んで、エンゲルスを怒らした事件も、ベルンシュタイン版と違って、リャザノフ版マ、エ、書簡集の索引には指摘してない）、これは公平とは思われない。ラッサール対マルクスの関係のことは少し調べたことがあるから、簡単に書いて見よう。

ラッサールが一八六三年ドイツで社会党運動を起した功績は、後にマルクスも承認した。前記のシュヴァイツェルに対して彼れは「ラッサールは十五年の仮睡の後、再びドイツに労働者運動を覚醒せしめた。――これは彼れの不朽の功績たるもの」だと言っている。しかしこれはラッサール死後のことで、その生前においては彼れはただにこの運動を援助しなかったのみならず、エンゲルスとの往復書簡を見ると、二人はひそかにこの運動を攻撃する時の戦闘準備を整えていた。何故かかる態度でこれに臨んだかといえば、マルクス自身に言わせると、ラッサールの運動方針が彼れと相容れなかったからである。即ち「彼れが余りに時々目前の事情によって動かされ」、目的のために手段を択ばな過ぎたからであるという。これも充分理由のあることである。けれども別の場合には、マルクス、エンゲルス自身も、とにかく組織ある労働者運動を起すことが肝要であって、運動の初期においては綱領の原理などは余り喧しく言うには及ばない、という態度を取っている。例えばマルクスが起草した第一インタナショナルの規約理由書の如きにもそれが示されている。別の機会にエンゲルスは、「どの国でも新たに運動に参加する国において肝要なる最初の第一歩は、独立の政党として労働者を組織することであって、それが特別の労働党でありさえすれば、如何にしてかは敢えて問わない」と明言している。これ等の場合と、ラッサールに対する態度とは確かに違っている。やはりここにマルクス対ラッサールの私交上の悪感情も働いたと見るのが当然であろうと思う。

マルクスとラッサールとの交際は一八四八年以来のものであるが、爾来二人の間には度々不愉快な出来事が起って

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

おり、一八六二年の夏ラッサールがロンドンに彼れを訪問した時、マルクスの不快は頂点に達した。

この時マルクスがエンゲルスに向って、汚物を吐き出すような調子でラッサールを罵った文言は、ベルンシュタインが原文のままには書簡集に収録し兼ねたものである。「ユダヤ人黒奴ラッサールは幸いにも今週の終りに出発するが、彼れは相場をやり損って幸いまたもや五千ターレルを失った。あの男は、利子と元金とが保障されていても、なお金を『友人』に貸すよりはむしろ泥溝へ投げるであろう。それは自分がユダヤ人男爵として、或いは男爵化された（多分ハッツフェルト伯爵夫人を通じて）ユダヤ人として生活しなければならぬという考えから出発しているのだ。考えて見てくれ給え。あの男はアメリカとの話その他を承知しながら、即ち僕の目下の危機を承知しながら、失敬千万にも僕の娘の一人をハッツフェルトの『附添婦人』に出してはどうか、また僕自身をゲルステンベルクに世話させようかときくのだ。あの男は僕に時間を費させた。そうしてあの畜生（Vieh）は、僕が今何も『仕事』をしないで『理論的労作』のみをやっているから、彼れと一緒に時間を潰しても差支えないと思っているのだ。この小僧に対して多少の外観を繕うため、妻は釘付け、鋏留めになっていない物はことごとく質屋に運ばなければならなかった。」

これは一八六二年七月三十日附の書簡の一節である。「そこへ持って来て、作り声の絶え間なき饒舌、美的でない見せ附けの身振り、人を教える語調だ」という文言もある。

何故ラッサールがこれほどの不快をマルクスに感ぜしめたかというに、同じ手紙の中の別の文言によれば、一にはドイツの文壇での成功者たるラッサールの成金振り、学者気取り、思想家気取りに堪えられなかったのである。

そこへ更に不愉快な金銭問題が搦らんで来た。それはマルクスが窮境を脱するためにエンゲルスに手形を振り出させ、その引受けをラッサールに求めたところが、ラッサールが念のためエンゲルス自身の証明を要求したので、マルクスが怒って皮肉を言い、それを更にラッサールが怒ってマルクスに詰問したことから、両者の感情が極度に悪化したのである。その後マルクスは反省したか、珍しく和解の態度を示し、お互いに誤解があったけれどもこれほどのことで仲違いすべきではない、「我々の友情における実質的なものは、かかる衝撃にも堪え得るだけの力を有すると僕は思う。……だから僕は吾々の古い関係が『凡べてのことにも拘らず』依然として傷つけられずに続かんことを望

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

む」と言ったのであるが（一八六二年十一月七日附ラッサール宛書簡）、既に時機を失したのでラッサールはこれに答えない。これで二者の文通は絶えたのである。前のエンゲルス宛書簡その他を読んでいる第三者には、今更「我々の友情の実質的なもの」云々といわれてもラッサールの答えなかったことが（無論ラッサール自身はマルクス、エンゲルスの文通内容は知らないけれども）当然に感じられる。

この後間もなくラッサールの運動が起ったが、マルクスは無論これを援けず、エンゲルスとの文通で盛んにラッサール嘲罵を交換した。マルクスがラッサールを援けなかったのはその主義方針に不同意のためであるというのは、無論事実である。しかしそれだけではない。ラッサールが人に、マルクスとは金銭問題のため仲違いしたといったのも、真相は尽していないが、事実無根ではない。この点リャザノフのマルクス伝は公平を失していると思う（拙著『社会問題研究』参照）。

これは一の挿話に過ぎないが、マルクスの人物を描くための一の材料として引いた。マルクスは人を愛さぬとはいえないが、より多く、より強く憎み、嫌う型の人物であったように見える。彼れは共産主義社会の善美に憧憬しない訳ではないが、遙かに強く資本主義社会の醜悪に反感を感じた。或る人のいう通り、社会主義者たるマルクスの『資本論』には、資本主義のことは書いてあるが社会主義のことは書いてない。社会主義の建設よりも資本主義の崩壊の解剖が特に彼れの性情に適したのである。彼れが特にユトーピヤを描かぬと称する理論は好く分っているが、しかしこの理論の背後にはこの偉大なる否定者の性情が働いていたように見える。彼れがゴータ綱領案批評の回状中に、数言将来の共産主義社会の状態を嘆賞的に予想して記したのは、ちょっと気がゆるんだという形である。歴史の進行は畢竟悪しき一面が善き一面を克服することに外ならぬという説（『哲学の窮乏』）は、マルクスの発明ではないとしても、この憎悪者、否定者に最もふさわしい説である。

ゾムバルトはその著『プロレタリヤ社会主義』（*Der proletarische Sozialismus*, II Bde. 1924.）の中でマルクスの性格の特色を五つ挙げている。学問的稟賦（ひんぷ）、激情的支配欲、政治能力の欠乏、否定的攻撃的性情及び憎嫉（Ressentiment）がそれである。また彼れの性格の特色をなすものは、「敵に対する憎悪と報復欲、競争者に対する羨望と嫉妬、随従者に

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

対する君主感、人類一般に対する深き軽蔑」だという評語にも同意している（Bd. I, S. 73, 63.）。ゾムバルトのマルクス評は決して公平冷静なものとは受取れないが、しかし度の強さを加減すれば、これ等の評語に確かに同意し得るものがある。

ついでに記すとマルクスの人物については、マルクス自身の唱えた唯物史観をマルクスの人物そのものに試みると称して奇僻なる観察を試みたものがある。『マルクス、生涯と事業』の著者オットー・リューレがそれである（Otto Rühle, *Karl Marx, Leben und Werk*, S. 472.）。リューレはマルクスの人物をその健康状態によって説明せんとしている。それによると、マルクスの生涯において肝臓病は夙くから一の役目を働いている。この病気はマルクス家の世襲病と思われ、マルクス自身もその遺伝があると思っていた。彼れは生涯ひそかに肝臓病を恐れていた。彼れの肝臓病は多分消化器の虚弱と胃腸全体の障害と密接の関係を持っていたものらしい。彼れは肝臓病の徴候に苦しんだのみならず、重症なる新陳代謝機能の障害及びその附随現象と見るべき食欲欠乏、便秘、胃腸カタル、痔疾、瘍腫等にも苦しんだ。リューレはこの新陳代謝機能の障害にマルクスの性癖を求めている。例えばかくいう。「彼れが食事に対して正しき関係を有せずして、或いは少なく、或いは不規則に、或いは不愉快に食べ、しかしその代りにその食欲を常に mixed pickles（西洋福神漬の類）や、強き香料や醋漬の胡瓜やカヴィヤー等で刺戟したように、彼れは仕事に対し、人間に対して正しき関係を持たなかった。悪しき飲食者は悪しき労作者、悪しき僚友である。彼れは何も食わぬか、胃腑を飽満せしむるか、全然仕事を厭うか、仕事のために倒れるか、人間を避けるか、誰れもが利益せぬ凡べての人の友となるか、である。彼れは常に極端に動く。……学生として講義に出席し、職業のための準備をする代りに、彼れは哲学的文学的 mixed pickles をその精神的胃腑に詰め込んだ。マルクスには規律と秩序の念と摂取と消化との正しき比例に対する感覚とが欠けていた。しばしば幾月も全然筆を執らぬかと思えば、たちまち学問の深淵に突入してチタンの力をもって労作し、昼も夜も蔵書全部を掘り返して山の如き抜萃を作り、部厚な原稿を書き、死ぬ時は半成未完の作物の堆積を後に遺した。……彼れは甚だしく精神的美味を愛する人であった。しばしば家族は飢えに瀕して原稿料を待っているのに、彼れは締切到来の論説を、常に援助を辞せぬエンゲルスに押し付けて、自分はギリシャ・ロー

SAMPLE
Shoshinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マの古典に耽り、図書館の最も貴重なる宝物を捜り、美味なる文学のカヴィヤーを舐め、或いはスノッブ的快楽をもって高等数学を営んだ」（四五一頁）。

唯物論的考察を個人の伝記に試みることは決して無意義でない。しかし如何にこの方法を適用すべきかはよほど困難な問題である。昔の俗説とは反対に、今日の新しい通俗説は歴史進行上において特定の個人が勤める役割をなるべく低く、小さく見ることに努めている。これは無論反動としてやむを得ないが、しかしシーザー、ナポレオン、ビスマルク、マルクス、レーニンの位置に他の何人を代りに置いても、歴史の経過内容に変りはなかったろうということは、無論云えない。即ち特定個人の個性、――その勇気、意志力、智能、性癖等――は確かに歴史の経過に影響する。そこでそれ等の特定人の個性は如何にして因果的に説明すべきものであるか。これを唯物論的に説明するとすれば、やはり先ず遺伝と環境とに着目しなければなるまい。従って体質健康ということも無論無視することは出来ない。しかし外界の事物が個々人の心意上に起す反応は、定量的に測定し得るものでないから、或る人の性格や遭遇をその疾病によって説明せんとする如きは、即ち例えばマルクスの人物を肝臓病患者として説明せんとする如きは、目下のところただ奇抜な観察と評すべきであって、未だ学問的に価値ある結論としては取り扱うことが出来ない。ただここにはリューレの説を、往年のマックス・ノルダウのEntartungに類する性格解剖の一の試みとして紹介するだけである。

マルクスとヘーゲル

次に、マルクスの思想についてあまり順序なく所感を述べたい。

マルクスにプロレタリヤ階級なるものの存在と人間解放者たるその歴史的使命とに着目せしめ、また而してその人間の解放は私有財産の解消によって行われることを納得させたものは、フランスの社会主義者及び共産主義者であったといわれる。時々引用される通り、マルクスは始め共産主義反対者であって、一八四二年十月十六日の文章では、まだ「共産主義思想には、その現時の形態においては、決して理論的現実性を認めず、従っていわんやその実践的実

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

現を希わず、それを可能とも考え得ぬ」と言ったのであるが、その後間もなく社会主義の確信に到達した。即ち一八四四年発表の「ヘーゲルの法律哲学批判」では、既にプロレタリヤの革命的使命を教え、ドイツ解放の積極的可能性を、私有財産の廃止を要求するプロレタリヤ階級の形成に求めた。

然るにプロレタリヤを発見し、社会主義の結論に到達する以前に、マルクスには既にヘーゲル哲学があって、その一切の思想の出発点を成している。ヘーゲルの歴史哲学は一個の弁神論（Theodizee）だといわれている。彼れは世界史において、遂行せらるべき、且つ遂行せられたる合理的なる世界計画、世界精神の形における神の啓示を見たのである。「神は世界を統治する。その統治の内容、その計画の遂行が世界史だ」と彼れはいっている。既に計画であるからそれは予定の終極目的がある。その終極目的は何か、人間の自由である。然らばこの終極目的によって以って実現せらるる手段は何であるか。人間の行為、欲望、利害、激情の働き全体である。世界史上においては激情と私欲なしには何事も行われるものではない。ヘーゲルはいう。人間は本来善なるものだといえば、人は、何か偉大な事を言ったように思っているが、何ぞ知らん、人間は本来悪なるものだという言葉は、更に遙かに偉大な事を言い現わしているのである。ここにいう悪は、歴史的発展の動力が現れる形式である。利欲や激情はそれ自体として決して善きものではないかも知れないが、この善くないものによって世界史の終極目的が成就される。世界精神はその目的を実現するために、これ等人間の欲望や利害関係や激情等を道具として、手段として利用する。各人はそれぞれ己れの利害を追求して行動する中に、知らず識らず、或いはその意図に反して、神の世界計画を実現するように仕組まれているのである。各人は主観的には全然自由に独立に行動しているつもりかも知れないが、人間は実は世界精神の傀儡であって、世界精神によって割り当てられた戯曲の役目を演じているに過ぎない。これ即ち彼れの所謂「理性の欺瞞」である。即ちヘーゲルにあっては、或る人または或る民族の歴史的使命という言葉が、ただ一片の比喩的形容でない、真実の意味を持っている。即ち世界計画を成就するために世界精神によって特定の個人または民族に割り当てられた役目である。

マルクスは後にフォイエルバッハによってヘーゲル主義の檻から出たといわれるが、しかし彼れにとっても、世界

SAMPLE
Shoshinshin.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

史の終極目的が自由の実現であるということは変らない。ただこの自由の実現せられた状態は如何なるものかというと、マルクスは社会主義者の影響によって、それは私有財産の廃止された状態であって、この状態を実現すべき歴史的使命を担えるものがプロレタリヤであるという確信に到達したのである。

「哲学がプロレタリヤにおいて物質的武器を見出す如く、プロレタリヤは哲学においてその精神的武器を見出す」云々は、マルクス自身の思想的閲歴の記録とも見ることが出来る。而して既にヘーゲル哲学者がプロレタリヤを発見すれば、私有財産の解消、共産主義の必然的実現は、ただブルジョワ社会とプロレタリヤとを対立せしむることによって、それ以上は何等の実証的知識をまつことなしにも、純論理的に結論することが出来る。

『神聖家族』（一八四五年）の一節に彼れはそれを試みた。彼れは私有財産の世界の両形成物として富とプロレタリヤとを対立せしめ、この対立が共産主義において止揚されることを説いた。陳腐であるがその本文を引用する。

「私有財産は私有財産として、富として己れ自身、またそれとともにその対立者、即ちプロレタリヤを存続せしむることを余儀なくされている。これがこの対立の積極的方面、己れ自体において満足せる私有財産である。」

「これに反し、プロレタリヤはプロレタリヤとして己れ自身、またそれとともに、己れを制約する対立者、彼れをプロレタリヤたらしむる対立者を即ち私有財産を、止揚することを余儀なくされている。これは対立の消極的方面である、それ自体における不安、解消せられたる、また解消しつつある私有財産である……。」私有財産からは対立維持の運動が起り、プロレタリヤからは対立絶滅の運動が起る。

「尤も私有財産はその経済的運動において、自ら己れを駆って自己の解消に赴かしめる。しかしそれは、己れ以外に独立する、無意識なる、その意志に反して行われ、事の性質によって定めらるる発展によって、即ちプロレタリヤをプロレタリヤとして造ることによって、己れの精神的肉体的窮乏を自覚せる窮乏、己れの非人間化を意識し、従って己れ自身を止揚する非人間化を造ることによってそれをするのである。プロレタリヤは私有財産がプロレタリヤを造ることによって自己の上に下した判決を執行すること、あたかも他人の富と己れの窮乏とを造ることによって賃銀労働が己れ自身の上に下した判決を執行すると同様である。プロレタリヤが勝利を得ても、それはそれによって決し

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

て社会の絶対的方面とはならぬ。何となれば、それはただ己れ自身とその対立者とを止揚することによってのみ勝利を得るからである。その暁には、プロレタリヤも、これを制約する対立者即ち私有財産も、等しく消滅しているのである。」

この引用によって見れば、マルクスはこの時既によほど『共産党宣言』の思想に近づいている。しかしここに引用されただけのところでは、私有財産解消の必然性は、ただ抽象的先験的に論結されているもので、まだ現実社会の実証的研究に基づいて論結したものではない。敢えてその当時のマルクスが経済学に不通であったとは言わないが、仮りに全く不通であったとしても、ヘーゲルによって、「肯定—否定—否定の否定」なる階梯による事物の論理的発展ということを学び、世界史の予定目標は自由の実現であるということを学び、而してその上に、現行財産制度の否定者たるプロレタリヤの存在を指示されれば、仮りに現実社会の機構に無知識であっても、プロレタリヤは己れ自身とその対立者とを止揚することによってのみ勝利を得る、という結論に到達することは出来る。右に引用されただけのところでは、社会主義の結論は弁証法応用例題の解答という程度以上には出ていない。しかし無論マルクスの思索はここで停止しているものではない。

ヘーゲルの世界精神とマルクスの物的生産力

プロレタリヤは私有財産の否定者であるという。そのプロレタリヤは何時、如何にして私有財産を否定するか。マルクスはここで更にその奥にプロレタリヤそのものを動かす力を求めて、「物的生産力」に到達した。

プロレタリヤは私有財産の否定者ではあるが、決して随時随意にその事を遂行し得るものではない。第一、プロレタリヤの発生そのものが、彼れ自身の自由なる選択の結果ではない。プロレタリヤ自身は、或いは主観的には自由に意欲し、自由に行動したつもりかも知れないが、実は事物の背面にこれを促進し、または制約するものがある。物的生産力がこれである。

プロレタリヤは舞台の上で演技する役者である。しかしこの役者は勝手気ままに動くのではなくて、舞台の下、も

SAMPLE
Shomi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

しくは背後からこれを動かす作者がある。ただ真実の役者とは違って世界史上の俳優は、自分が一定の筋書の或る役割を演じていることを自覚せず、自分では全く自分の意思欲望に従って自由に行動しているつもりでいるかも知れない。しかもその自覚するとせざるとを問わず、客観的には一定の筋書に従って動くものであることに変りはない。マルクスはこの背後から舞台上の演技者を動かす最後の力を物的生産力に求めたのである。彼れは既に『神聖家族』の中に、一時代の「工業、もしくは生命の直接生産方法」を知ることなくしてはその時代の歴史的現実を認識することは不可能である旨を暗示し、「歴史の出生地」は天上の雲霧の中でなくて、「地上の粗なる物質的生産」に求めなくてはならぬと説いている。然るに「工業もしくは生命の直接生産方法」を知ることは経済史経済学によらなければならぬ。即ち彼れが長足歩をもって経済学の研究に驀進した所以である。

「ドイッチェ・イデオロギー」の中に彼等（マルクス、エンゲルス）は、生産力の発展が階級的対抗を発生せしめ、この階級的対抗が独り階級的対抗のみならず、階級そのものを撤廃せんとする革命を生み出すということを、かなり明確に説いている。生産力の発展とプロレタリヤ或いは革命階級一般についてはこう書いている。

「生産力の発展上において到達する或る段階において、喚び起さるる生産力及び交易手段は、現存関係の下においてはただ害のみをなし、従って最早生産力たらずして破壊力（機械、貨幣）たるに至る。――而して、これと関聯することであるが、社会の利益を享受することなしに、その一切の重荷を負担しなければならぬ一階級を、社会から押し出され、他の凡べての階級に対して決然たる対抗に立つことを余儀なくせらるる一階級を出現せしめる。この階級たるや一切社会成員の多数者を成し、根本的革命の必要に関する意識即ち共産主義意識のそれよりして発生するところの階級である。云々。」（*Marx-Engels Gesamtausgabe*, Abt. I, Bd. 5, S. 59.）

既にこの立場に立てば、また当然宗教哲学道徳等の精神的産出物は凡べて独立の存在を有するものでなくて、究極的には物的生産力から説明せらるべきものだとしなくてはならぬ。有名な「意識が生活を定めるのでなくて、生活が意識を定める」という文言も、既に「ドイッチェ・イデオロギー」の中に見出すことが出来る。かくしてマルクスにとっては物的生産力が最終のものになった。然るに物的生産力を吟味することは、経済学の任でなければならぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『神聖家族』以前のマルクスが経済学に無知識であったとは言われないが（最近校訂発表せられたマルクスの「哲学的経済学的手稿」は初期のマルクスの経済学勉強の跡を示している）、それ以後における彼れの主力が市民社会の経済学的解剖に傾けられたことは当然である。この頃以後のマルクスには、その歴史哲学上の立場には何ほどの変化も認められないが、経済学者としての彼れは著しい進歩を遂げた。既に「ドイッチェ・イデオロギー」（一八四六年）によって唯物史観の原理を学んだ者は、「経済学批判序文」（一八五九年）における有名な公式を見ても少しも驚くところはないが、『哲学の窮乏』（一八四七年）の経済学と『資本論』（一八六七年）『余剰価値学説論』におけるそれとは同日にして語ることが出来ない。但し注意すべきは、経済学者として進歩したというのは、資本的生産方法に対する解剖の精緻を加え、経済学文献に対する知識が豊富を加えたことを指して言うのであって、私有財産制度の必然的解消という社会主義的結論は『神聖家族』の時代と少しも変ってはいない。故に別の章にも書いた通り、マルクスの経済学研究はマルクスの結論を動かしてはおらぬ。彼れの経済学研究は既成の「構造を改変せぬ限りにおいての竣成必要工事――恐らく若干の補強工事及び装飾を含む――であった。」

以上の如くにしてマルクスはヘーゲルを離れ、彼れ自身の言うところによれば「ヘーゲルとは正反対の」弁証法を得た次第である。成程確かにマルクスの弁証法とヘーゲルのそれとは違っている。理念と物質、意識と生活とに関する二者の見方は確かに正反対だといって好い。しかしなおそれにも拘らず、吾々はマルクスに対するヘーゲルの強い影響を看過することが出来ない。それはマルクスもヘーゲルも共に世界史をもって既定の世界計画の遂行と見ていることである。世界史の究極目的は、両者いずれにとっても既に定まっている。ヘーゲルにとっては自由の意識の実現である。マルクスにとっては私有財産の解消による人間の解放である。世界史に直接参加する者はいずれも現実の人間であり、人間は種々なる欲望、野心、本能等によって動かされて動く。しかしその直接の動機の何たるによらず、それ等個々人または集団の行動は必ず人類を一定の方向に導く結果の生ずるように按配せられてある。その一定の結果が必ず生ずるように按配する者は誰れであるか。無論ヘーゲルの場合には世界精神であるし、マルクスの場合には物的生産力である。人間はヘーゲルの場合に世界精神の道具として使われるように、マルクスの場合には物的生産力

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の傀儡として踊らされる。ヘーゲルは英雄の世界史上における役目を論じている。それによれば、英雄とは自己の欲望と世界計画の必要との一致せる人々、「その自己特殊の目的が、世界精神の意志なる実体的なるものを含める」偉大なる人々をいうものであって、歴史上における偉大なる事業はこの世界史的人格の激情によって始めて行われるという。これは正にマルクスのプロレタリヤ観に相当する。プロレタリヤがブルジョワジーの搾取抑圧を撤廃せんとするは、ブルジョワジーがこれを維持せんとすると等しく同じ程度の私欲に発している。しかもプロレタリヤのこの私欲の行動は、自由の実現という世界史の究極目的を実現する道具となる。即ちプロレタリヤは正にその特殊目的と世界史の必要との一致せる英雄（ヘーゲルの場合における）である。ただこの英雄は、ヘーゲルの場合における如く世界精神の道具でなくて、凡べての上に支配する物的生産力の道具として、その志すところを遂行する使命を担う英雄である。ここに物的生産力の「志すところを」と書いたのは必ず異様に思われるであろう。無論物的生産力に意志のあるはずはない。しかしマルクスの歴史観上において物的生産力というものが、ヘーゲルの世界精神の如く、「志すところ」があり、また志すところを必ず遂げる力を有するものの如くに取り扱われていることも事実である。プロレタリヤ階級の歴史的使命という言葉をしばしばマルクシストは口にする。しかし「使命」ということは、厳格にいえば、一定の目的の達成を托せらるる場合に始めて意義をなすはずである。ヘーゲルの場合には、歴史は或る目的の遂行過程であるから、無論それは厳格な意味に解しての意味を有する。しかしマルクスの場合には、本来物的生産力の発展のため因果的に或る結果が生ずるというに止まり、世界計画を立て、世界史の終極目的を予め定める者はないはずでなくてはならぬが、しかもなお且つ或る階級の歴史的使命を云々するのは、暗々裡にやはり世界史を、人間を道具に使っての或る目的の遂行過程と見るからであろう。その目的は誰れが立てたか。無論マルクスは生産力以上の理念をここへ持ち出す訳に行かない。彼れにとっては物的生産力が最高最終のものでなくてはならぬ。即ちマルクス及びマルクシストが往々物的生産力を必ず一定の方向に動く意志あるものでもあるかのように取り扱う所以である。現在社会の与えられたる条件の下において資本主義の崩壊、共産主義の実現は多くのポシビリチーの中の一に過ぎない。マルクシストがこれを唯一のポシビリチーとして説いているのは、運動者の志気を鼓舞する戦術上の策略も含ま

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

れていると思うが、同時に世界史をもって既定の目的の実現行程と見るヘーゲル的歴史観の影響も看過することが出来ぬ。

マルクシズムと千年王国の信仰

マルクスの唯物史観なるものが物的生産力を絶対的なるものとし、この物的生産力が人類を駆って既定の世界計画を遂行せしめるとなす歴史形而上学に陥らんとする趣があり、而してこの点において強くヘーゲルの影響を示すことは、前段に述べた。これと関聯して記すべきはマルクスとエンゲルスに存すと見らるる千年王国の信仰（Chiliasmus）である。

ここに千年王国の信仰というのは、必ずしもかのヨハネ黙示録（第二十章）に見える、世界の終りに先だつところの地上におけるキリストと信者との千年間の支配のみを指すと限る必要はない。広く幾多の民族に伝わる、人類はその過去において失った楽園（または黄金時代）を必ず将来において取り戻すという神話に対する信仰の謂である。過去に失われた楽園については、聖書のエデンのことは誰れも承知している。同様の神話はヘシオドにもヴァジルにも、またエッダにも見出されるということである。

将来の楽園については旧約アモス書には、「エホバ言ふ視よ日いたらんとす、その時には耕者は刈者に相継ぎ葡萄を践む者は播種者に相継がんまた山々には酒滴り岡は皆鎔て流れん」（第九章十三）とあり、イザヤ書には、「おほかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし犢牡獅肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみちびかれ、牝牛と熊とはくひものを同にし、熊の子と牛の子とともにふし獅はうしのごとく藁をくらひ、乳児は毒蛇のほらにたはふれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん。斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の海をおほへるごとくエホバをしるの知識地にみつべければなり」（第十一章六―九）とあることはしばしば引用される通りである。

キリスト教では、これが千年王国の約束として現れている。ヨハネ黙示録によれば、世界の終り、永遠の幸福に先

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

だって、一千年間救世主と信者との支配が行われる。その時天使は天より降ってかれ悪魔たりサタンたる竜、すなわち老蛇を執ってこれを千年のあいだ繋ぎ置き、またイエスの証および神の道のために首斬られたる者は皆生きてキリストとともに千年の間王となるというのである。

エッダに見える北欧伝説にも、将来の楽園に関する同様の記述があって、この世界が滅びた後には、海洋の胎から一の新しい世界が生れ、そこには争闘の代りに平和が、嫉妬の代りに愛が、欲情の代りに喜悦が、暴力の代りに正義が行われるとされているそうである。

過去において――恐らくは罪過のために――失われた楽園が将来再び取り戻されるという信仰とヘーゲル歴史哲学との関係については、必ず論ずべき題目があると思うけれども、今それをするだけの準備がない。ただこの楽園回復の思想が多くの社会主義者に認め得られるということは同感の士があることと思う。もとより「科学的」なるマルクス、エンゲルスに、千年王国の信仰が上述の如き文字をもって表白せられていないことは言うまでもないが、しかし原始共産主義の崩壊によって一たび失われた楽園が、人類の苦難の長き歳月の後、プロレタリヤによる私有財産の解消によって再び恢復せらるるものの如くに説き、個々人の意志如何に拘らず、人類は目に見えぬ力に導かれて、階級なく、争闘なく、暴力なき状態に向って進みつつあると説くところには、やはり冥々の裡にヒリヤスムスの影響があると解せられる。而して一般に社会主義、殊にマルクス主義の勢力は、この信仰に負うところがすくなくないのである。

マルクス、エンゲルスにおけるヒリヤスムスは、例えばマサリックの如きもこれを指摘している。その書に曰く、「マルクスに従えば、進歩にも拘らず、史的発展はその出発点に復帰するのである。それは畢竟旧約全書の観方である。マルクスは始原の楽園を信じ、また将来の楽園をも信ずる。従って資本主義時代全体は単に一のインテルメッツォに過ぎない。共産主義のアダムは楽園から逐われたが、しかしまた再びそこに復帰して救われるのである」と。（T. G. Masaryk, *Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus*, 1899, S. 213. 社会主義と千年王国の信仰の問題は Gerlich, *Der Kommunismus als Lehre vom tausendjährigen Reich*, 1930 に論ぜられている。）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

前述の如くマルクスは「歴史の出生地」を天上の雲霧でなく、「地上の粗なる物質的生産」に求めなければならぬという思想を進めて、世界史の起動力たる物的生産力に到達した。この物的生産力の発展が人間社会を、——無論人間の意欲の上に作用することによって——或る一定の方向に駆り立てるとしたのである。然るに物的生産力は本来盲目なものであるから、この生産力の発展が社会的関係の上に或る変化を持ち来すということは差支えないが、この力に駆り立てられて、人間社会が果して何処へ往くかは、往って見た後でなければ分らないはずである。（無論多くのポシビリチー、或いはプロバビリチーは認められるが。）然るにマルクス等が、生産力の発展は必ず共産主義の実現というただ一つの方向に向って人間を推進するかの如くに信じ、もしくはそう説いたのは、前述の如くヘーゲルの形而上学的歴史観の影響によるものであるが、また千年王国の信仰もこれに手伝っていると解せられる。（希わしいものを必然なるものと認め、或いは揚言するという心理については別に説く。）

故に厳格なる唯物史観の立場から言えば、物的生産力の発展は因果必然的に或る結果をもたらすというだけのことで、一の状態とその次に起る状態との間には価値の高下の差別は有るべからざるはずであるが、上述の通り、マルクス、エンゲルスは暗々裡に、或いは明白に、生産力の発展から起る変化を凡べて或る終極目的に向っての変化と見ているから、発展は必ずより高きものへの発展、即ち進歩（Fortschritt）である。而してこの厳格な唯物史観にとって本来異分子とも見るべき進歩の思想が、却って唯物史観普及の有力原因となっていることは、既に指摘している学者もある。

自由主義者ルードウィヒ・ミーゼスの『共同経済論』（*Die Gemeinwirtschaft*, 2. Aufl., 1932）の論旨は一々皆正鵠を得たものだとは思われない。しかし彼れが唯物史観に存する進歩思想に却ってこの史観の人気の原因があると論じているのは同感である。彼れに従えば、唯物史観には三つの要素が含まれている。即ち歴史的社会学的研究方法としての唯物史観、社会学説としての唯物史観、而して一の進歩理論としての、即ち人類の運命、人間生活の意味及び本質、目的及び目標に関する学説としての唯物史観がそれである。研究方法として、社会的発展の認識に対する発見原理と

SAMPLE
Shoshishinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

しての唯物史観からは、無論社会主義社会の必然的実現という結論は生じない。社会学説としての唯物史観についても同様である。一切従来の歴史は階級闘争の歴史であるという社会理論からは、何故に他年一日一切の階級闘争が全くその跡を絶たなければならぬかは説明することが出来ないという。ただ進歩理論としての唯物史観となると全く趣がちがう。曰く、「ただその進歩理論たる限りにおいてのみ、唯物史観は史的発展の目標について能く断言を下し、資本主義的生活秩序の没落とプロレタリヤの勝利とが等しく不可避のものであると主張することが出来る。社会主義思想の普及を助成したること、この社会主義不可避性に対する信仰に如くものはない。社会主義反対者の多数者もまたこの学説の呪縛を受け、これがためにその抵抗力の麻痺を感ずる。識者は自ら『社会的』精神を吹き込まれておらぬことを示して時勢遅れ（unmodern）と見られることを恐れている。何となれば、今や社会主義の時代、第四階級の日が明けたから、そうして今なお自由主義に固着せるものは反動的だということであるから。いやしくも吾々を社会主義的生産方法に近づかしむる社会主義思想の成功は一々皆な進歩として尊重せられ、個別所有保護の方策は一々皆な退歩と認められる。或る者は鬱憂、否な悲哀をもって、他の者は歓喜をもって、個別所有の時代が時の変化とともに消え去ることを眺める。しかし凡べての者は皆なその没落の運命は歴史の定めるところでまたいかんともすべからざるものであることを信じている」と（S. 251-2.）。

進歩理論としての唯物史観は、最早経験を超越し、経験し得べきものを超越した形而上学の領域に踏み入るものである。

唯物史観と世界史の究極目標

前記の通り、ここではヘーゲル歴史哲学とヒリヤスムスとの関係は論じないが、両者いずれの立場から見ても史的発展には究極の静止点があるように思われる。歴史的発展は或る終極目標があって、この目標に到達すると発展がやむのであるかの如き印象を受ける。然るにマルクス、エンゲルスにもやはりそれがある。即ちこの二人の所説を読めば、プロレタリヤによる私有財産の廃止、共産主義の勝利によって、世界史はその究極点に到達し、人類はそのなし

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

得る限りの最高の発展を成就したものとされているように感ぜられる。もしも史的発展が所謂弁証法によって行われるならば、即ちもしも一事物は必ずその内から自己に対する否定を生み出し来り、この肯定と否定との矛盾が一段高い否定の否定への発展によって止揚せられ、このより高い段階は更にその中から自己に対する否定を生み出し来り、更に第二の矛盾の止揚が行われるものとするならば、そこに無際限の発展が行われなくてはならないはずである。

然るにマルクス、エンゲルスの言説によれば、共産主義の実現によって、人類はまさにその到達すべき本然の状態に到達、もしくは復帰したものとせられているようである。共産主義の実現以前において人類が幾度となく繰り返して来た生産力と社会形態との衝突、またそれを反映する階級と階級との闘争が、共産主義実現以後の歴史においても更に際限なく反覆されるのだとは説かれていないのである。

弁証法殊に唯物弁証法を教えられた者の中には、当然疑問を起すものがあるであろう。いわく、物的矛盾の止揚によって共産主義が実現されるように、共産主義の中から更にそれに対する否定が生れ出で、例えば原始共産体が崩壊して私有財産制度が起ったように、将来の共産主義の中から更にこれに対する否定として新たなる私有財産制度が生じ来るのではなかろうかと。

しかしマルクス等は将来の共産主義から「弁証法的に」生れ出で来るべき、共産主義そのものに対する否定のことは説かぬ。矛盾の止揚による発展といい、悪しき一面が善き一面を克服することによって行われる歴史の進行というのは、ただ共産主義実現に至るまでの歴史について言われたものであるか。或いは人類の歴史のあらゆる段階について適用があるのであるか。読者は必ず尋ねたいと思うであろう。しかもマルクス、エンゲルスは極めて簡単に、ブルジョワ社会形態とともに人類社会の前史は終るとか、或いは共産主義の実現とともに人類の必然の国から自由の国への飛躍が行われるとか言い張る（behaupten）ことによって、弁証法学生の質問を封じてしまった形がある。

共産主義の実現せられたそれ以後の人間社会の唯物弁証法的発展というものは、果して如何にして行われるか。思うに、これは必ずマルクシズム学習者を悩ます疑問であろう。往年『無産者新聞』の紙上では、一時盛んにマルクシズム理論に関する読者編輯者の質疑応答が行われたが、私は参考のため、努めてその中の興味あるものを書き抜いて

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

置いた。今の場合に関係ある問答としては左記のものがある（大正十五年十二月二十五日）。

（問）社会が常に弁証法的に進化するとせば、未来社会の胎内にやがて孕まるべき「矛盾」とは如何なるものでありましょうか。（牛込〇生）

（答）「哲学者は世界をいろいろと説明した、だが世界を変革することが問題だ」とマルクスは教えています。我々は解決し得る問題のみを問題とする、共産社会の現実的発展は我々には明らかではない。だが我々にとっては現社会が必然的に崩壊するということ、及びそれが如何なる発展過程を取るかということの究明――実践――が問題です。理論はそれが真実であることを実践によって証明されねばならぬ。理論のための理論は、理論が単に理論として正しいかどうかを考え込むことはやくざな小ブルジョワ的スコラ哲学流であります。あなたのそういう考え方を匡正するために前掲の書物をお読みになることを希望します。（「前掲の書物」とはエンゲルス著佐野文夫訳『フォイエルバッハ論』、河上肇訳『レーニンの弁証法』、福本和夫著『社会の構成並に変革の過程』、『理論闘争』等を指す。）

ここでもやはり質問が封じられている。それは未来社会における「矛盾」を論ずること、否な未来社会における「矛盾」の可能を認めることが、当面の実践にとって不得策だからであろう。しかしそれと同時に反面には、繰り返して言うように、共産主義を世界史の窮極目標と見る形而上学がここに働いているからだと解せられる。

唯物史観の一面と革命的実践

自然の順序として唯物史観と革命的実践との関係を論じたい。

もしも物的生産力の発展が必然的なものであり、而して物的生産力の発展がまた必然否応なしに資本的生産方法を崩壊せしめて、社会主義的社会秩序を到来せしめるものであるならば、実践的革命努力はそもそも如何にして根拠づけられるかということは、マルクシズム入門者の必ず一度は起す疑問で、また常に簡明な答を与えてもらえない疑問である。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

しかしこの問題は後廻しにして、私は先ずマルクシズムにおいては、その唯物史観が、実践的行動の一の根拠を提供している一面を先ず指摘したいと思う。

マルクスはフォイエルバッハにもヘーゲル主義の檻を脱出したといわれている。しかしマルクスは一度は彼れを導いたフォイエルバッハにも直ぐ不満足を感じ、彼れを越えて更に前進した。それは彼れが後者の受動的唯物論に満足することが出来なかったからである。彼れは前記の通り、フランス社会主義者によって解放者たるプロレタリヤの歴史的使命なるものを理会した。而して一たびこの所謂哲学者にとっての「物質的武器」を見出すと、彼れは最早世界の客観的なる解釈者たることをもって甘んぜず、直ちにプロレタリヤに接触を求めてこれとともに実践的行動に進もうとした。彼れがパリにおいて熱心に労働者の会合に出席し、またブルュッセルに逐われてからも労働者の間に組織を造るに努力したことは、伝記者の記している通りである。然るに抽象的理論的なるフォイエルバッハの唯物論は、実践行動者たるマルクスにとっては不満足に堪えない。彼れは一層具体的、主観的、実践的、行動的なる唯物論を求めたのである。

「一切従来の唯物論――フォイエルバッハのも含める――の主なる欠陥は、対象、現実、感性が単に客体もしくは観照の形式の下にのみ把握せられて、感性的人間的行動として、実践として、即ち主観的に把握せられぬことである。故に行動的方面は唯物論と反対に観念論――無論現実的感性的行動そのものを知らぬところの――から抽象的に展開される。フォイエルバッハは感性的なる、実際に思惟の客体と区別せられた客体を欲している。しかし彼れは人間行動そのものを対象的行動として把握せぬ。故に彼れはキリスト教の本質において、ただ理論的態度をのみ純人間的態度と見る一方、実践はその醜汚なるユダヤ人的現象形態においてのみ把握され注視されている。従って彼れは『革命的』『実践的批判的』行動の意義を理解せぬ。」

「果して人間の思惟に対象的真実性が属するや否やの問題は、理論の問題でなくて、一個実践の問題である。実践上においては、人間はその思惟の真実性、即ちその現実性及び威力、此岸性を証明しなければならぬ。思惟の現実性及び非現実性に関する――実践から孤立せる――争いは、一個純然たる煩瑣哲学的の問題である。」

SAMPLE
ShoshinShisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

「境遇及び教育の変化についての唯物論的教理は境遇が人間によって変更せらるること、教育者そのものが教育されなければならぬことを忘れている。境遇の変更と人間行動の変更、即ち自己変化との一致は、ただ革命的実践としてのみ把握せられ、且つ合理的に会得せられ得る。」

以上は所謂「フォイエルバッハ論稿」の両三節で（*Marx-Engels Gesamtausgabe*, Abt. I. Bd. 5, S. 533, 534.）、いずれもフォイエルバッハの非実践的なるに不満を表明して、能動的行動を強調したのでないものはない。然らばマルクスにおけるこの実践の強調は何処から出て来るかと言うに、それは第一に彼れの革命的政治意志の要求だと答うべきであろう。しかしながら、それと同時に、彼れがその唯物論を徹底せしめて、一切のイデオロギーの独立存在を否認するに至ったことがその実践行動に対する根拠を与えているとも解せられる。即ち彼れはその唯物史観によって宗教、哲学、一般的に一切のイデオロギーを所謂「地上の粗なる物質的生産」の反映もしくは幻影と見る結論に到達した。然るに宗教、哲学等がそれ自体によって存在し、それ自体によって変化するものならば、これに攻撃、批評の加えらるることは有意義であるが、もしも彼れの今信ずる如く、意識一般は物質的生産生活の反映に過ぎないとすれば、物質的生産そのものを放置して、ただイデオロギーを批評することは、あたかも鏡の中の映像と格闘すると同様の無意義の所為であろう。唯一の有効にして有意義なる批評は、映像の鏡面外における実体に加えられるものでなくてはならぬ。而して現実的生産生活に対する批評は、現存の世界を否定し、目前の事物を「実践的に攻撃する」より外にはない。哲学に対する単に哲学的なる批評の如きは無意義である。ここにマルクスの「実践」を重んずる根拠が与えられるのである。

もとよりこれが唯物史観から生ずる唯一の結論だというのではない。マルクシストの反対あるにも拘らず、唯物史観が或る意味の決定論にも力を添えることは事実である。しかしマルクスが、イデオロギーに独立の存在を認めず、従って単にイデオロギーの世界内における争闘を無意義なりとし、唯一の有意義なる批評は革命的実践以外にはあり得ないとする根拠が唯物史観に存することも注意して置くべきである。そこで「哲学者は世界をただ様々に解釈して来た。肝要のことはこれを変革することである」という結論が生ずる。言うまでもなく、問題の変革者たるものは資

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本主義の世界においてはプロレタリヤである。すなわち曰う、この世界を変革するために、「万国のプロレタリエルよ、団結せよ」と。

社会主義運動の根拠

しかしここに多年来の問題がある。世界は何故に「変革」しなければならぬか、また如何ようにそれを「変革」すべきであるか。

この問に対する答は唯物史観によっては与えられない。唯物史観は生産力の或る程度の発展が或る種のイデオロギーを生み、また或る社会階級の或る方向に向っての努力を生むということは説明する。しかしそのイデオロギーまたは運動が、果して正当であるか否か、または何故に正当であるか、を説明することは出来ない。例えば資本主義の発達は多分プロレタリヤの団結の努力を生むであろう。唯物史観はその間の因果の関係を説明し得るはずである。しかしその発生の因果的に説明されるものは、必ずしもすべて是認し得るものではない。資本主義の発達は必ずプロレタリヤの団結の努力を生む。故に「プロレタリエルよ、団結せよ」といったら滑稽であろう。資本主義の発達から起る運動はプロレタリヤの団結努力のみではない。それ以外の幾多のもの、またそれに反対する幾多の努力も起り得る。これ等の諸運動は皆な資本主義社会の必然的所産であるから、皆な同等の存在権を持つ、と言えば、それは実践上の無主義に帰着する。現に資本主義社会において、一方において共産主義、他方においてファシストの運動が行われている。而して、もしも唯物史観が正しいものなら、この立場に立つ者は必ず生産力の発展ということによって、当然共産主義運動の起るべき所以を説明し、また他方当然ファシスト運動の起るべき所以を説明し得るはずである。然らば共産主義運動も当然起るべき原因があって起り、ファシスト運動も同じく当然起るべき原因があって起った。故に両者はともに等しく正当であると言って差支えなかろうか。無論マルクシストはそう言ってはならないはずである。マルクシストは必ずその一方を取って他方を排撃しなければならぬ。けれども、その一方を取り他方を排する根拠は、その発生が唯物史観で説明されるか否かという点に存するのではない。説明されるという点から言えば、両者は

SAMPLE
Shoshi-shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

共にそれぞれの原因があって発生したのであるから、共にそれぞれ説明されなければならぬ。しかし説明のつくものは正しいものだとは言われない。既にシュタムラーも言う通り、誤謬の見解も原因があって生じ、不当の行為も原因があって生ずる。もしもその生起の説明せらるるものは皆な正しいというならば、誤謬の見解も正しく、不当の行為も正しいという、真偽正邪絶滅の暴論に陥らなければならぬ。真偽のことはしばらく措く。人がもし共産主義運動に参加してファシスト運動に敵対するとすれば、それはこの二つの運動にその因って起るべき原因があるか否かという点に懸るのでなくて、それは必ず一方が正しく、他方が不当だとするからでなくてはならぬ。それは無論一方の行為が価値ある、もしくはより高き価値ある目的を実現するための適当なる手段であり、他方は然らずとする倫理的確信に基づくものでなければならぬ。表面上マルクシズムから排除せられているはずの倫理的規範の上に立つものでなくてはならぬ。或いは「万国のプロレタリエルよ、団結せよ」といい、或いは共産党に参加してファシストを排撃せよというとする。この場合にかくすることの結果として得らるるものが価値なきものであるならば、それを得んがために「団結せよ」とか、「参加せよ」とかいうことは無論無意義であるし、また云々の行為をなすとなさざるとに拘らず、一定の結果は必ず実現せらるるものならば、云々せよということはこれまた至極の無意義である。どうしてもこの場合には倫理的確信に基づいて正しき目的に対する正しき手段如何の問題が答えられなければならぬ。而してこの倫理的判断は無論選択の自由を予想するものである。別言すれば、この社会主義の実現を真実必然とすれば、正邪可否の判断は意義をなさない。

もしも社会主義社会の実現が必然であるならば、何の必要があってこの必然の結果のために努力しなければならぬか、というのは古くからの問題である。そこでその必然の意味如何であるが、もしもそれが全然他のポシビリチーを容さぬ、真実厳格なる必然の意味であるなら、こういう意味の必然の結果に向って努力するということは、それこそ或る人のいう通り「旭日よ、昇れ」「四季よ、循れ」と努力するにも等しい、全くの無意義である。

無論社会的事象は人間の意欲を通じて変化するから、これを日出日没や四季の循環と全く同様に取り扱う訳には行かない。しかし、もしも或る外象が人間の意欲の上に或る働きをなし、それから一定の行為が生れ、その行為が社会

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

関係上に一定の結果を生むというその因果の関係において、個々の連鎖が全く抜き差しならぬ、且つまた全然他の可能性を容さぬものであるならば、意欲を通じて動くというのは名ばかりで、それは自然現象と撰ぶところはない。或る目標に向って努力せよという場合には、無論、黙って置けば努力しないという可能性と、努力しなければその目的は成就しないという可能性とを前提しなければならぬ。それでもなお且つ社会主義の必然的実現を云々するとすれば、それは前述の如き歴史形而上学に頼らぬ限りは、運動当事者に免れ難い、かくあれかしと願うところと必ずかくあると認めるところのものとの善意の混同に出でたか、或いは運動者を激励するための宣伝技術と見るべきであろう。

マルクスは歴史的経過の受動的観察者でなくて、実践的に現存状態を動かさんとする革命家である。しかし「世界を変革する」ことが肝要だという場合のマルクスに、現存状態に対する倫理的批判、共産主義社会に対する倫理的希求がないはずはない。物的生産力発展の必然の結果は資本主義の崩壊、社会主義秩序の実現をもたらすというが、マルクスはもとより生物学者が生物体の変化を観察するように、その間の因果関係を究めようとしたのではない。右の所謂「必然の結果」は、マルクス、エンゲルスの熱烈なる希願の対象である。而してこの希願が資本主義社会に対する倫理的批判に発することは言をまたぬところである。ただ彼等はこの倫理的批判を整然たる体系に構成することを憚り、ただその瞋恚（しんい）を「圧迫者と被圧迫者」とか「破廉恥なる搾取」とか、ブルジョワジーは「人格的品位を交換価値に解消し、無数の確認せられたる既得の自由に代らしむるに一の無良心なる交易の自由をもってした」等の文言に洩らしている。これ等の文言が倫理的規範をその背後に持たなければ意味をなさぬことは言うまでもないところである。事実マルクス、エンゲルスの各時代の著作から、自然法的、功利主義的基礎付けと解せらるべき文句を拾い出すことは少しも困難でない。フォアレンダーはその「マルクス伝」中に、マルクスがライン新聞主筆時代、ライン州会における林木盗取法問題を論じて、人間は森林所有者よりも重んぜられねばならぬという法律的道徳的根拠から、力強く「貧しき、政治的に社会的に無資産なる群衆」の味方をした事実を挙げて、最初マルクスを駆って社会主義に赴かしめたものは道徳であったことを示す一例としているが、誠にその通りであろう。（K. Vorländer, *Kant und Marx*, II.

SAMPLE
ShoshinSuisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

Aufl., 1926, S. 285 ; *Karl Marx*, 1929, S. 54)。

マサリックは、政治的に、実践的に、且つ感情的に「マルクスもまた科学的社会主義者たるよりも遙かに夙(はや)く社会主義者であった」といっているが（S. 39, Anm.）、事実上彼れを社会主義者たらしめたものは唯物史観ではなかったろうし、またそれでなかったことが当然である。換言すれば、マルクスは実はその熱烈に希う状態を、生産力発展の必然の結果として、否応なしに到来する状態として、説いたと見られる。前に述べた、共産主義実現後における弁証法的発展如何の問題の如きは、この見地から見れば問題にはならないのである。マルクスは何よりも第一に共産主義を欲している。それが出発に先だって既に与えられてある結論である。ただ彼れは、それを欲していると言わないで、それは必然的に到来すると言った。だから共産主義から先きの弁証法的発展の如きは彼れにとってはどうでも好いことであったろう。前に私有財産とプロレタリヤとを「肯定」及び「否定」として「弁証法的」に共産主義の結論を引き出したが、肯定と否定とには何と何とが当てはめられようとも、「否定の否定」は必ず共産主義でなくてはならぬ。それがマルクスの予定の結論である。やや酷評に聞えるかも知れないが、マルクスはその好むところの結論を引き出さんがためにただ弁証法的口吻を弄した形跡のあることも否定し難い事実である。ゾムバルトはマルクス、エンゲルスの著作について共産主義によって止揚さるべきものとされている種々様々の「矛盾」を拾い出して列記している。それによると左記の諸事項が肯定及び否定として対立させられている。

富の生産――貧窮の生産
生産力の発展――抑圧力の発展
ブルジョワ的富の生産――個々人の富の破壊
封建的独占――競争
経営内の組織――市場における無政府
私有財産――資本家による収奪

而していずれの場合においても「否定の否定」は常に共産主義である（*Der proletarische Sozialismus*, Bd. I, S. 231-21

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

4.)。これでは読者に何度ふり直おしても六の目の出る骰子を想起させるであろう。

共産主義必然論

唯物史観に含まるる必然論と社会主義運動の論拠とを如何にして相調和せしむべきかは、マルクシズム研究者に早速起る難問である。而して多くの場合この疑問は正面的の答を与えらるることなくて斥けられているようである。一例として再び『無産者新聞』相談欄の問答を引用する（大正十五年四月二十四日）。

（問）唯物史観によれば、「世の中はほって置いてもなるようになる」と解釈されるのに、インタナショナルの運動は理想主義的運動で、これは明らかに矛盾ではないかとの末梢的非難に対してどんな風に答えたらよいでしょうか。（ＡＢＣ生）

（答）どんな風に答えたらよいかとのお尋ねですが、もしそういう疑問を抱く人がいたら、「君は一体どの階級に属する人だ、資本家か労働者か、地主か小作人か」と聞き返してごらんなさい。そうして社会的現実の立場から観察すれば唯物史観が研究論であるかどうかは労働者には直ぐ了解されます。理想主義と自然主義の矛盾、決定論と自由主義の矛盾は唯物的弁証論が解決した問題ですからその方面から説くことも良いでしょう。しかしただ唯物的弁証論は資本家階級には宿らないことだけは注意を要します。余白がないために簡単にします。

これは無論質問者を満足させる解答ではあるまい。質問者は編輯者の不興を買い、不適当の質問をしたことに対して訓戒でも与えられたような感想を得たであろう。しかしこれは珍しいことではない。これに類する質問応答はマルクシズムの教師と学生との間に今日まで幾度となく繰り返されている。ここにはただその一例として『無産者新聞』の問答を借用したに過ぎないのである。

以上引続いて述べたことを綜括して繰り返していうと、マルクスの共産主義必然論は

一には、世界史をもって既定の窮極目的に向っての進行と見る形而上学に基づき、

一には、社会主義者のかくあれかしと願うところのものと必ずかくあると認めるところのものとの善意の混同に出

SAMPLE
Shoshinshin.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

で、

また一には、社会運動上において同志者を激励し、反対者を志気沮喪せしめんがための政策的揚言として聴くべきものである。

マルクシズムはそれが形而上学に立脚する限りにおいては、もとより学問的研究の範囲外に属する。かくあれかしと願うところのものと、かくありと認めるところのものとの混同は、これは錯覚であるから問題にはならぬ。もしまたそれが政策的揚言であるならば（マルクス主義者の言説に政略的揚言もあることは、無論彼等自身も自認するであろう。如何なる政党でも究極における自党の勝利を揚言せぬものはない。）、それはその本質が明らかになった瞬間に効力を失う。いずれの点から見ても必然論は成立しない。吾々の言い得ることは、ただ社会主義者の努力はそれに有利なる、また不利なる様々の条件の下に行われる。その条件の如何によって社会主義の実現は可能である、もしくは蓋然的（probable）であると言うに尽きる。それ以上に進んで必然といえば、それは上記の場合のいずれかに帰着するであろう。而して社会主義者の努力そのものの根拠は倫理的根拠でなくてはならぬ。或る社会形態を実現しようとする努力はその社会においてより善きより正しき生活が保障されたという確信以外のものをもってジャスチファイすることは出来ない。それを憚り、もしくは含羞（はにか）んで、ただ言葉の表面で倫理を排斥することは全く無益の所為である。

マルクスの社会学に対する貢献

以上些かマルクスに不利なる評言を列ねた。次には唯物史観の長所、その社会学的研究に対する至大の貢献について述べなければならぬ。それは人間の経済的活動と社会形態の変化との関係の考察がマルクスによって多大の進歩を遂げたこと、これである。

社会主義者の努力、一般に言って、一の新たなる社会秩序の実現に向ってする努力が倫理的に基礎づけられねばならぬことは前に述べた。しかしこれ等の努力の成功するか否か、或いは果してどの程度まで成功するかは、与えられたる条件の如何にもよることであって、決して彼等の努力如何によってのみ決せらるるものではない。否な、この努

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マルクシズム（講義要項）

前言

カール・マルクスは実践家としても理論家としてもその生前には不遇の人であった。彼れは一八四八年前後の革命期における実践運動にも失敗し、また一八六四年より一八七二年までの第一インタナショナルの指導においても結局は失敗したのみならず、理論家としてもその生前においてはほとんど何等の注目すべき批評を受けなかった。『共産党宣言』が出て後約三十年『資本論』が出て後約十年の一八七五年になってまだ肝心のドイツ社会党がマルクスの意に背くも甚だしいゴータ綱領の如き綱領を可決採用したという一事がすでに充分這般の消息を物語っている。オイゲン・デューリンクの攻撃に対してマルクスを弁護し、彼れの真趣旨を明らかにせんとしたエンゲルスがかの有名な「反デューリンク論」を党の機関紙『フォアヴェルツ』に連載し始めた時、デューリンク心酔者の多い党内にはエンゲルス攻撃の声が起って、この原稿の続載を禁止もし兼ねまじき勢いであったが、ようやく或る人の提案に従い、右機関紙の本紙でなく、その特別附録に掲載させることにしてようやく問題が処理されたという如きことは、今日ではほとんど聞いても信じ難いほどのことであるがしかし間違いのない事実であった。

マルクシズムがようやく社会主義運動者及び学界に認められ始めたのは、十九世紀も一八九〇年代に入ってのことである。マルクスが生前注目すべき批評を受けなかったことは前に述べたが、彼れの死後におけるマルクシズムの影響は、マルクシズム文献の増加によってこれを卜することが出来よう。ゾムバルトがその『カール・マルクスの事業』（一九〇九年）という小冊の中に報道するところによればマルクスの歿年（一八八三年）までにマルクスについ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

て書かれた著作は僅かに二十を算するに過ぎなかったということである。それがそれから一八九四年資本論第三巻の出るまでには五十八を数え、一八九四年から一九〇四年までの間には既に二百十四に上ったということである。然るにマルクス・エンゲルス・アルヒーフによれば、世界大戦開戦以来一九二五年九月に至るまでにヨーロッパ語（ロシヤ語を除く）をもって発表されたマルクス文献は八百六十余篇の多きに上った（*Marx-Engels Archiv*, Bd. I）。而してマルクシズムのこの盛行を促進した最大原因の一は、いうまでもなくロシヤ革命である。この革命が全世界各国に与えた影響は、百余年前フランス革命が当時の欧洲諸国に与えたそれに比較すべくしてその深刻は更に幾倍を加えるものである。独り欧米のみならず東洋文化の諸国において、マルクスの著作は必ず多少の程度においてその国青年の思想を動かしている。わが邦のマルクス文献については今正確に記すことは出来ないが、前年大原社会問題研究所の調査するところに従えば（内藤糾夫編『邦訳マルクス・エンゲルス文献』昭和五年）、マルクス・エンゲルスの著作にして日本語に翻訳されたものは、昭和三年（一九二八年）十二月までに約二百二十種に上っている。それにその後の刊行及びマルクス・エンゲルスを論ずるものを加えたならば、よほどの数に上ることであろう。ただ一つの『資本論』についても、高畠素之氏の翻訳はその改造社から出版せられた分のみで発売部数は確実に十万部（五十万冊）を超えたと聞いている。しかもこの多数のマルクス・エンゲルス文献で、年時の上からいってロシヤ革命以前に属するものは僅かに二種もしくは三種しか挙げられていない。それには或いは脱漏があるかも知れないが、とにかく日本でもロシヤ革命がマルクシズム盛行の大原因たることは疑いないのである。最近においてはマルクス主義者の言説が陳套に流れて生気を失い、また有力なる共産主義者に変説転向する者が続出したりしたため、ややマルクシズム退潮の観を呈しているが、しかもマルクシズムは最も力強き否定の合理主義的理論を含んでいるから、しばらくその真実の学問的価値を別としても、今後もなお充分青年及び被支配階級の心に訴える力を失わぬものであろう。（第二次大戦以前に記す。）

マルクス、エンゲルス年譜

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マルクシズムを論ずるには、まずマルクス、エンゲルスの生涯、事業及びその著作のことを述べなければならぬはずであるが、今時間がそれを許さぬから、左に簡略なるマルクス、エンゲルス年譜を掲げてこれに代える。無論この二人の閲歴でその思想を理解するために必要なる限りのものは、左記マルクシズム生成を説く条下において自然言い及ぶことになるはずである。

一八一八年　ドイツ、トリエルに生る（五月五日）、名はハインリヒ・カール。父ハインリヒ弁護士を業とす。母はヘンリエッテ、プレスブルグ氏。共にユダヤ教を奉ず。

一八二〇年　フリードリヒ・エンゲルス、パルメンの由緒あり富裕なる商家に生る（十一月二十八日）。

一八二四年　マルクスの同胞キリスト新教に改宗す（八月二十六日）（但し父ハインリヒはこれより先き一八一六年の頃新教の洗礼を受けていた）。

一八三〇年　トリエルの中学に学ぶ。パリに七月革命起る。母、子等と同じく改宗す。

一八三一年　ヘーゲル、ベルリンに死す。ポーランドの叛乱起る。

一八三二年　ハムバハ祝祭行わる。

一八三五年　中学の業を卒え、ボン大学に入る（十月十五日）。

一八三六年　ジェニー・ヨハンナ・ベルタ・フォン・ウェストファーレン（一八一四年二月十二日生）と婚約す。ベルリン大学法学部に入り（十月）法学、哲学、史学を修む。

一八三七年　エンゲルス中学を去って商業に就かしめらる。英国にチャーチスト運動起る。

一八三八年　父死す（五月十日）。

一八三九年　五月パリにブランキ党の叛乱起る。

一八四〇年　プルドンの『所有とは何ぞ』（*Qu'est-ce que la propriété?*）出づ。

一八四一年　イエナ大学にエピクルス哲学に関する論文を提出して学士の称号を受く。ボン大学の私講師たらんと試む。果たさず。エンゲルス、志願兵として近衛砲兵隊に入る。モーゼス・ヘスの影響を受く。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

唯物史観と共産主義的帰結

事新しくいうまでもないことであるが、エンゲルスによれば、唯物史観と余剰価値論とが社会主義を科学たらしめたマルクスの二大発見である。しかしながら、唯物史観と余剰価値論とでは、そのマルクシズムにとっての意義において軽重がある。前者は重く、後者は軽い。

もとより余剰価値論なるものは、マルクス得意の一理論であって、その大成のために彼れはよほどの苦心を費したには相違ない。しかしこれは彼れ独特の理論と見るべきものではない。余剰価値論は、畢竟労働賃銀以外の所得は皆な支払われざる労働をもって成るということを教えるものである。然るに、社会主義者という社会主義者は、素とこれ皆な搾取の撤廃を志すものであるが、そもそも強奪によらず、任意交易の方法によって搾取が行われるという事実を証明するためには、必ず何等かの価値理論によらなければならぬ。即ち価値理論に基づいて、労働者はその労働によって提供し、もしくは造り出しただけの価値を、その報酬として受けてはおらぬということを明らかにしなければならないのである。極めて自然の次第として、それをするに社会主義者は大概は労働価値説に拠った。然るに、その労働価値説は、通常解せらるるところによればリカードーによって大成せられたものである。ここにおいてリカードーとほぼ同時代のイギリスは、彼れの価値論に基づいて労働搾取論を立て、また社会主義的改造案を主張する一団の著作家を出した。所謂「リカードー派社会主義者」がそれである。しかしながら、リカードーの価値論に余剰価値論の出発点を求めることは、決してこの一派の人々に限ったものではない。否な、近世の重なる社会主義体系は、経済理論上においてはみなリカードーに出発しているといっても差支えないくらいである。ロードベルトスが然り、プルドンが然り、而してマルクスもまた然りである。故にマルクスの余剰価値論と他の諸家のそれとの間に如何に精粗の

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

差異はあるにもせよ、これをもって彼れの新発見とすることは当を得たものではない。

更に新発見なるか否かを措いて、そのマルクスの共産主義に対する関係如何ということになると、二者の軽重は更に甚だしきものがある。マルクスの余剰価値論が教えるところによれば、資本家の利子利潤、地主の地代は、労働者の産出した価値の搾取に成るものである。しかしながら理論上彼れはこの労働搾取を不当としてこれにその共産主義の論拠を求めたのでないことは、わざわざエンゲルスも指摘している通りである。価値の全部がその産出者たる労働者の手に帰せぬことを不当として、この理由から共産主義的結論を引くということは「経済に対する道徳の適用に外ならぬ」ものであって「経済上においては形式的に謬っている。」然らばマルクスの共産主義的要求の根拠は何処にあるか。彼れは「これを我々の目前に日々行われつつある資本家的生産方法の必然的崩壊に」求めたのだというのである（『哲学の窮乏』序）。而してこの資本主義必然的崩壊の結論が唯物史観の上に立てられたものであるのは言うまでもないことである。然らば、資本主義崩壊の理論に対して余剰価値論はどれほどの用をなしているかというに、その寄与するところは軽少であるように見える。マルクスの唯物史観は、一八四七年の『哲学の窮乏』には既にほとんど完成に近い形で現れているが、近年リャザノフ等によって発表せられた「ドイッチェ・イデオロギー」によって観れば、その根本思想は既にこの原稿の起草せられた時、即ち一八四五年に把握せられていたことが明らかである。否な、更にその前の『神聖家族』の一節にも、マルクスは私有財産の制度の消滅をば、富とプロレタリヤとの対立から必然的に生ずる論理的帰結として説いているのである。しかもこの当時における彼れの経済学的素養は、不充分なものであって、未だ余剰価値理論と称し得べきほどのものを持ってはいなかった。大体において、彼れが価値論余剰価値論に着想し、これを大成したのは、その共産主義的結論に到達した以後のことであったといって好かろう。故に別の機会にもいったように、「余剰価値論に出発するブルジョワ社会の経済学的解剖は……毫もこの結論（資本主義崩壊の結論）を動かしてはおらぬ。マルクシズムの大建築は、既に唯物史観によってその構造が決定している。彼れの『宣言』以後における経済学の研究は、この構造を改変せぬ限りにおいての竣成必要工事——恐らく若干の補強工事及び装飾を含む——であった。」

SAMPLE
ShoshinShisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

更にマルクスの余剰価値論及びその根拠たる価値論のほとんど致命的の欠陥ともいうべきは、それが賃銀の決定、従って搾取余剰価値額の決定理法を説明し得ないことである。余剰価値は余剰労働によって造り出されるという。しかしながら、その造り出された余剰価値が労働者自身の手に収得せらるるか、或いは利潤、地代となって有産者のものとなるかは、一に賃銀率の高低によって定まるはずである。その賃銀率の高低が価値論余剰価値論をもってしては説明し得られないのである。

マルクスの思索がそれから出発したリカードーの経済学においては、正しかれ正しからざれ、とにかく商品の価値価格、労働の価値価格に対する統一的の説明がある。商品の市場価格がその自然価格を、即ちその生産費をその引力中心として変動する如く、労働の価格たる賃銀もまた同じくその自然価格即ちその生活費に帰向する約束を持っている、と説いたのである。市場価格が自然価格の上下に離隔する時は、供給を自動的にこれに適応せしむる作用が行われる。商品の場合には、価格が生産費を超過すれば生産が増加し、労働の場合には、賃銀が生活費を超過すれば、同じく労働の生産、即ち人口が増加すると説いたのである。然るにマルクスは、リカードーの賃銀論の根拠となるマルサス人口原則を排棄したから、彼れにあっては、労働力の価値は労働力の価格、即ち賃銀に対して最早吸引作用を行うことが出来なくなった。従って、彼れにおいては、賃銀は労働力の供給とこれに対する需要との関係によって定まるというだけに止めるの外なくなったのである。而して労働力の供給を定めるものは結局労働人口であり、労働力に対する需要を定めるものは総資本中の可変部分であるというのであるから、マルクスの賃銀説も結局は一種の賃銀基金説に帰着する。ただその賃銀基金が、彼れにあっては、流動資本の一部分たる可変資本たることを一の特色とする相違があるだけである。かくマルクスの価値論は賃銀の決定理法を説明することが出来ぬものであって、この点において彼れの価値論が彼れの分配理論にとって価値なきことを主張したヂーツェルの意見は、私の全然賛成し得るところである。(H. Dietzel, *Vom Lehrwert der Wertliehre und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre*, 1921.)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

共産党宣言の今昔

前書き

半世紀も前の話であるが、ドイツの学者ゾムバルトがまだマルクスに心酔していた頃に『共産党宣言』についてこう書いたことがある。「幾十年、社会的事物の研究に没頭したものでも、常に予期せざる未聞の真理を、共産党宣言の中に発見する。自分はすでに幾百回これを読んだ。しかもなお再びこれを手にすれば、毎回新たにこれに惹きつけられる。」

私は「宣言」を無論「幾百回」などは読んでいない。しかし明治の終りにはじめて幸徳傳次郎、堺利彦の共訳文に接して以来、十回や二十回はたしかに読んでいる。読んで「常に予期せざる真理」をその中に発見したとはいえぬかも知れないが、何時も新しい興味を感じ、『共産党宣言』の今昔というようなことを感じさせられるのは事実である。昨年の夏、内外学生の参加する或る国際的講習会でも、私はこれを主題として講演を試みたが、最近にカーの『革命研究』(E. H. Carr, *Studies in Revolution*, 1950)、ラスキの『共産党宣言への歴史的序説』(山村喬訳、法政大学出版部)、スウィージーの『社会主義』(野々村一雄訳、岩波書店)、猪木正道「スターリン」(中央公論新年特大号)を読んで興味を誘われたので、それ等にも触れつつ、自分の講演ノートを眺めつつ、この問題についての雑談を試みたい。

共産党宣言

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

『共産党宣言』はドイツ語で書かれ、一八四八年、フランスにおける二月革命の直前に、ロンドンで印刷された。起草者はマルクス、エンゲルスの両人である。二人のいずれがいずれの部分を受け持ったというような考証は、しばらく略す。二人は当然「宣言」で言われた一切のことに共同に責を負う。同時にまた、「宣言」の或る版の序言中にエンゲルスが記して、宣言の核心をなす「根本的の提説はマルクスのものである」といったのも、エンゲルスの謙譲を認めつつ、一応そのままに受け取るべきものとする。

「宣言」は短い前置きの外、一、「ブルジョワとプロレタリヤ」二、「プロレタリヤと共産主義者」三、「社会主義及び共産主義文献」四、「様々なる在野諸党に対する共産主義者の地位」の四章をもって成る。最も原理的に興味があるものは右の第一章、次いで第二章に含まれている。

マルクス、エンゲルスが「宣言」で説いたのは、資本主義は資本主義の発達それ自体によって破局的崩壊に導かれる、ということであった。資本主義はやがて己れ自身に向けらるべき兇器を鍛え、また、その兇器を揮うべき人を造るという。その兇器というのは、資本主義社会にとって過大となる生産力、人というのは、近世プロレタリヤであった。

少し詳しくいえば、宣言はまず、一切従来の歴史は階級闘争の歴史であるという。封建制度の廃墟から生じたブルジョワ社会におけるそれは、ブルジョワジー対プロレタリヤの闘争であるが、前者の没落と後者の勝利とは、ともに不可避であるという。それはブルジョワジーが必然的に発達せしめる物質的生産力が、必ずブルジョワ社会に包容し切れぬほど増大して、破壊作用をなすと同時に、同じくブルジョワ社会の発展とともに必然的に発展するプロレタリヤが、必ず政治的にブルジョワジーの支配を覆えすというのである。そこに次ぎの句が来る。「ブルジョワジーがそれをもって封建制度を倒した武器は、今、ブルジョワジー自身に向けられる。しかしブルジョワジーはただに己れに死をもたらす武器を鍛えたばかりでなく、この武器を用いるべき人々をも造り出した——近世的労働者、プロレタリエルが即ちそれである。」

生産力の過大なる発達の結果は恐慌となって現れ、「ブルジョワ社会全体を混乱に陥らしめ、ブルジョワ所有を危

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

うからしめる。」一方、プロレタリヤは、工業の発達とともにその数を加え、その組織を堅くし、そうしていよいよその力を自覚する。凡べての階級闘争は政治闘争であり、プロレタリヤの階級への組織は、政党への組織となる。やがて隠密なる内乱は公然たる革命に破裂し、「ブルジョワジーの強行的倒壊によってプロレタリヤがその支配を確定する」時が到来するというのである。

一切の従来の運動は、少数者が少数者の利益のためにする運動であったが、プロレタリヤの運動は、絶大なる多数者の、絶対なる多数者のためにする独立の運動である。現在社会の最下層たるプロレタリヤは、公認社会を形成している諸階層の上部建築全部を空中に飛ばさなければ、自ら起き、自ら立つことが出来ない。

さて政治的支配権を獲得したプロレタリヤは、その権力を「ブルジョワジーから漸次一切の資本を剥奪し」、「一切の生産用具を国家、即ち支配階級として組織せられたプロレタリヤの手に集中し、生産力の量を能う限り速かに増加せしめる」ために利用する。かくして、やがて階級別が消滅したならば、公権力はその政治的性質を喪うであろう。けだし「真個の意味における政治的権力なるものは、一階級が他の一階級を抑圧するための組織せられた権力」に外ならぬからである。かく政治的権力が消滅するということは、後にマルクス、エンゲルスの説くところによって、国家の消滅と同じ意味に帰することが明らかである。国家の消滅したその後に残るものは、階級別、従って階級的対抗のない社会である。それを「宣言」には、「各人の自由なる発展が全員の自由なる発展のための条件である一のアッソチアチオン」といってある。

凡べての時処において、右のプロレタリヤ運動全体の利害を代表するものが共産主義者であるという。また、一方においては、それは「凡べての労働階級党中最も進歩し、且つ決然たる分派、他の凡べてを推進するその分派」であり、他方においては、大衆に先んじて「プロレタリヤ運動の諸条件、進路及びその究局の一般的結果を洞察する」先頭者であるともいっている。そうして全篇の最後に、共産主義者の目的は、一切の現存社会秩序の強行的顛覆によってのみ達せられる、「プロレタリヤの獲得すべきものは世界であり、失うところは鉄鎖の外に何もない。万国のプロレタリエルよ、団結せよ」というのである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

革命の必然性

ここで考えるべきは、マルクス、エンゲルスが革命を恣意的（或いは主意的）のものとせず、特にその必然性を強調したことである。必然の根拠は何かといえば、生産力の発達である。勿論革命は革命精神なくしてはあり得ないが、その革命精神を、彼等は独立自在のものとせず、これを生産力の発達に倚存（いぞん）するものとした。謂わば革命を生産力の函数として説明した。ここにマルクシズムの特色がある。この結論に到達するまでにはマルクスに成長があった。

それを回顧すると、マルクスはまずヘーゲル哲学をもって出発したドイツ革命家であった。しかし、一八四三年の終りに近くパリに移住するまでの彼れは、まだ共産主義者たる確信に到達していなかったように見える。本国のドイツで、ライン新聞の主筆をしている頃、すでに隣国のフランスから聞こえて来た「淡く哲学的に着色された」社会主義の反響は、彼れの耳にも入っていたが、彼れは直ぐにはそれを受け容れなかった。その頃（一八四二年秋）書いた論説を見ると、彼れが一方においてそれに魅力を感じつつ、なおそれを希わしいとも、可能とも思うに至らなかった心境が察せられる。しかるに、一たびドイツを出てパリに住むに及んで、彼れの思想はこの方向に、長足の歩みを進めたように見える。その最初の記録は、一八四四年の「ヘーゲル法律哲学批判」の緒論である。マルクスはそこで、ドイツの解放はプロレタリヤにおいて始めて可能である、と説くようになった。

彼れによると、今日（当時）ドイツの市民社会に、一般的解放を遂行すべき欲望と能力とを持つものは一もない。ただここに一つの階級がある。それは「人間の完全なる喪失であり、従って人間の完全なる回復によって始めてよく己れを獲得し得る」階級、即ちプロレタリヤである。プロレタリヤが私有財産の否定を求めるのは、社会が「プロレタリヤの原理にまで高めたものを、……社会の原理にまで高めるに外ならぬ」という。かくてしばしば引用される文言が出て来る。曰く、「哲学がプロレタリヤにおいて物質的武器を見出す如く、プロレタリヤは哲学において、その精神的武器を見出す。」「……哲学はプロレタリヤの止揚なくしては自己を実現すること能わず、プロレタリヤは哲学

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

［附録］ラッサールとマルクス

引用最も頻繁なる書目及びその略符号

1) *G. R. S.* Ferdinand Lassalle, Gesammelte Reden und Schriften. Herausgegeben von Eduard Bernstein in Zwölf Bänden, Berlin 1919-20.

2) *Briefe L.* Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle. Herausgegeben von Franz Mehring, II. Aufl., Stutgart 1913. Bd. IV. Briefe von Ferdinand Lassalle an Karl Marx und Friedrich Engels von Februar 1849 bis Juli 1862.

3) *Briefe M. E.* Der Briefwechsel zwischen Friedrich Engels und Karl Marx 1844 bis 1883. Herausgegeben von A. Bebel und Ed. Bernstein, 4 Bde., Stutgart 1921.

4) *Oncken.* Lassalle. Eine politische Biographie von Hermann Oncken. Dritte vollständig durcharbeitete und erweiterte Auflage, Stuttgart und Berlin, 1920.

5) *Bernstein.* Ferdinand Lassalle. Eine Würdigung des Lehrers und Kämpfers von Eduard Bernstein, Berlin 1919.

6) *Mehring.* Karl Marx. Geschichte seines Lebens von Franz Mehring. III Aufl., Leipzig 1920.

7) *N. S.* Ferdinand Lassalle, Nachgelassene Briefe und Schriften. Herausgegeben von Gustav Mayer in 6 Bänden, Stutgart-Berlin, 1921-1925.

上　篇

一

ラッサールは一八四八年以来、マルクスの同志であり、またこの関係を持続せしめようと努めた跡が窺われるが、一八六三年ラッサールが、ドイツでドイツ全国労働者協会（Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein）の運動を起した時、ロンドン及びマンチェスターにいたマルクスとエンゲルスとは、毫もこれに声援しなかったばかりでなく、両者間の往復書簡集によって見れば、悪意の中立ともいうべき態度をもってこれに臨んだのである。ラッサール自身公衆に向ってはその旧同志との関係が、最後まで親善なりしものの如く装おうとしたようだが、マルクス、エンゲルスの緘黙が何を意味するかは、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

充分理解しておった。ラッサールに最も親近なるハッツフェルト伯爵夫人が、これを怨んで、マルクスが人をもってラッサールの不慮の死を弔せしめたのに対して、マルクスはラッサールを見棄てたと云い（*Briefe M. E.* Bd. III, S. 187）、また人に与えた書簡の中に「マルクスは政敵として、ラッサールに対してその遺産を相続せんがため絶えず陰謀を行った。彼れは一八五九年以来ラッサールの不倶戴天の敵である。――しかし決して偉大なる人物ではなくて、わずかにライン地方で知られているに過ぎぬ。学識はあるが、民衆を教える人ではない。今日までその亡命地において、彼れは一体何を完成したか。」と云ったのは（zitiert bei *Oncken*, S. 341）恐らく幾分ラッサール自身の感情をも表白するものであろう。

然らばマルクスは何故にラッサールの運動に対して右記の如き態度に出でたのであろうか。これに対しては、後にマルクス自らラッサールの後継者たるシュヴァイツェル（J. B. von Schweitzer）に向ってラッサールの功過を評し、また己れの態度を説明している。それに曰く、「ラッサールは、十五年の仮睡の後に、再びドイツに労働者運動を覚醒せしめた。――これは彼れの不朽の功績たるものである。――しかし彼れは大なる過ちを犯した。彼れは目前時々の事情によって動かされることが余りに甚だしかったのである。彼れはその出発点たる小問題を――矮小シュルツェ・デリッチ（Schulze-Delitzsch）の如きに対するその反対を――運動の中心問題として、自助自頼に対する国家的補助を主張した。これは畢竟フランス・カトリック社会主義の首領ビュシェーが、一八四三年以降、フランスにおける真の労働者運動に反対して唱えた標語を再び採用するものに外ならぬ。聡明なる彼れはこの標語をやむを得ざる過渡手段以上のものとは認めていなかった。ただその当面の（所謂）実行可能性のためにのみこれを是認することを得たのである。この目的のために彼れは最も近き将来にその実現し得べきことを主張しなければならなかった。そこで『国家』は変じてプロシャ国家となった。かくして彼れは、プロシャ国王、プロシャ反動主義者（封建党）否な僧侶党にまでも譲歩を余儀なくせられたのである。ビュシェーの組合に対する国家補助に彼れは憲章党の呼号した普通選挙を結び付けた。彼れはドイツとイギリスとの事情の相違を看過し、普通選挙法に関する低帝国（bas empire）の教訓を看過した。しかのみならず彼れは、当初から――民衆の苦艱に対する万能薬を所持すると主張するものの例に漏れず――その運動に宗派的性質を帯びさせた。……また彼れは正に宗派開祖なるが故に今までの運動とのあらゆる自然的聯絡を否認した。彼れはその運動の真正の基礎を、階級運動の現実的諸要素に求めないで、却って或る独断的なる処方に従って、後者の経過を指定しようとするプルドンの過ちに陥った。予が今ここに事後に云うことは、大部分ラッサールが一八六二年ロンドンに来て、予に彼れとともに新運動の先頭に立たん

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

価値論上の効用説と費用説

左の一篇は二三の大学学生の会合において試みた講演の大要である。

一

「効用説か費用説か」は古い長年の問題で、議論も大概尽きたように見えるが、今一応これを論じて、決してこの二つの説を相対立するものとして見る必要がないということを明らかにしたいと思う。

物の価値（経済価値）を説明するに効用または費用をもってせんとすることは、特に専門的の研究をせずとも誰れでも直ぐに想到するところであろう。

「如何なる物に価値があるか。」

「物に価値があるのは何故であるか。」

私はしばしば経済学入門の初学者にこの問を発して見るが、その答は不思議に相半ばする。物に価値があるのは、それが「役に立つから」というのと、造るに「手間がかかるから」というのがそれである。言うまでもなく、この答が極めて素朴な形における効用説と費用説とであるが、専門学者の学説も結局は大体この二者を出でぬといって好かろう。而して十八世紀以来十九世紀中葉に至るまで、価値論の主流をなすものは費用説であったが、一八七〇年代に入って遽かに効用説が勃興して、主客の位置が顛倒したように見えたこと、更にその後の発展においてこの両説の調和が試みられたことは、いずれも改めて紹介するまでもない世間周知の事柄である。私も効用説と費用説とは当然両立し得べきものだと考えている一人である。それは単に極端を忌む折衷説ではない。厳密な理論的推究上、必ずそう

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

なければならぬはずだと論結するのである。従来唱えられた重なる費用説の論拠を点検すれば、それは決して効用説を拒否し得るものではない。効用は価値の決定者でなくて単にその必要なる前提に過ぎない、云々の如きは、ただ言葉の表面上で効用説を排斥するだけの効果しかない。同時に効用説を取る者の側から見ても、或る場合或る種の財の供給量がそれを生産すべき費用によって調節せられ、従ってその意味において費用が価値を左右することは、少しも承認して差支えないことである。私は本章において這般の消息を明らかにし、併せて費用説というものが如何なる場合に、また如何なる場合に限って有効であるかを説明しようと思う。

二

価値を決定するものは何であるかを論ずるに先だって、先ず価値そのものの何たるかを定めて置かなければならないが、カッセル等の言う如く、この点については従来かなり無用の空論が戦わされた。しかし従来の価値論が取り扱った主題が、畢竟財と財との交換比率であったことは議論がない。A財とB財と（或いはC財とD財等々）が一定の割合、例えば一対三で相交換されるのは何故であるかというのである。

しかし交換が常則的に行われる処で財と財とが直接実物同志交換されるということはあり得ないと見て好いから、A対B（等々）の交換比率というのは、いずれも貨幣を通じての交換比率と解して好い。即ち例えばAとBとが一対三の割合で交換されるというのは、Aの一単位量とBの三単位量とが同一の貨幣額に対して売買されるということだと了解すべきである。然るに通説に従えば、一財と交換される貨幣額はその物の価格とされている。そうすると価値論の主題は畢竟一財Aの価格が他の財例えばBの三倍に等しく、C、D、E等々の五倍とか一倍とか二分の一倍とか等々に相当するのは何故であるかというに帰着する。

しかし従来の価値論殊に費用価値論者は、単に価格論に終始することだけでは満足しないのが常であった。諸々の財（貨物、または商品）は種々の価格をもって売買される。しかしこの価格の奥に価値がある。時々の価格は需給の関係如何によって様々に騰落するけれども、この騰落は決して放恣無制限に行われるものでなくて、或る中心を持っ

SAMPLE
Shoshinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ている。この中心から外れた価格は必ずここに復帰しようとする。この中心をなすものが即ち価値だというように考えたのである。即ち彼等の解する価値は、市場における一時的可変的なる価格に対する永続的恒常的なる価格であった。これが市場価格に対する自然価格または正常価格と称せられた。されば、価値論は多くの場合自然価格論であったといって大過なかろう。従来学者が価値とは一物の他物一定量と交換せらるる力（交換力、または他物購買力）だという場合、彼等が考えたことは大凡そこのようなことであった。勿論価格と価値とは往々同義の言葉と解せられ、その随意に混用併用せられた実例はすくなからず数えられるが、しかし価格と区別してこれに対して価値という場合には、価格の重心、または価格の奥にあってこれを支配するものと解することが常であったように思われる。いずれにしても価値論の任務は、価格を究極的に説明することにある。価格を説明し得ない価値論は価値論の任務を果していないものである。

私も今、価値をしばらくかくの如きものと解釈して効用説と費用説とを吟味する。これ以外に別の価値概念を立てることは随意である。ただ今はそれ等の問題に立ち入らない。

三

先ず費用説の論拠から吟味して見よう。

費用説によれば、貨物の価値はその生産に要せらるる費用によって定まるという。換言すれば、生産の費用の相等しきものはその価値が相等しいというのである。敷衍すれば、一物に比して二倍の生産費を要するものは二倍の価値を有し、半分の費用を要するものは半分の価値を有するということになる訳である。

しかし価値は費用によって定まるということは、二様の意味に解せられ得る。費用相等しき生産物は相等しき価値を有するのが正当である、費用の相等しい貨物が違った価格で売買されるのは不当だ、という意味に解するのがその一である。費用価値説をこの意味において主張したものは従来すくなくない。しかしこれは畢竟倫理的要請であって、本来の経済理論の領域内に属することではない。今一つは、その正当なりや否やは別として、費用の相等しき生

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

産物は究極的には必ず互いに相交換される。生産物交換の割合と費用の割合とが一致せぬということは、永続的にはあり得ないという意味で主張せらるる費用説である。吾々が先ず吟味せんとするものはこの意味での費用説である。

生産物の価値が費用によって決せられるということは、或る条件の下においては、何人にも直ぐ納得できる、明白な理論である。その説明は極めて簡単に出来る。

仮りに凡べての者が如何なる物をも任意に自由に生産し、これに対しては形式上事実上全く何等の障害なきものとせよ。かかる条件の下においては、等しき費用をもって生産せらるる諸貨物が高低異なる価格をもって売買されるということは、到底起り得ぬことが明白である。もしも費用が相等しいのにその売買される価格に高低があれば、必ず何人も価格の低い方を避けて高い方に移るはずである。そうすれば、高い方の生産高は増して価格を下落せしめ、低い方の生産高は減じて価格は騰貴する。同様に一物に比して二倍の費用を要するものは二倍の価格をもって売買されるであろう。もしそうならなければ、必ず比較的不利な生産から有利な生産へ移動が起って、前者の生産額を減じ、後者の生産額を増すことによって、価格の相対的騰貴と下落とを惹き起すであろう。而してこの騰落は、費用に比例した価格の成立するに至って始めてやむであろう。これだけのところにおいては、何人も費用説の真理なることを疑うものはない。それは最も会得し易き道理である。

価値は費用によって決定されるという説は、皆なここに根拠を求めている。即ち費用相当以上の価格が成立した場合には、いわば自動的に起る供給の増加がその価格を引下げ、反対に、費用相当以下の価格の成立した場合には、供給の減少が価格を引上げるというのである。これに反し、もし費用に相当した価格が成立すれば、生産技術が変化するとか、或いは需要の増減があるとかいう外部的原因が起らぬ限り、価格そのものの中からは価格を動かす作用は起らない。即ちかかる価格はそれ自体の中には変動の原因を包蔵せざる価格である。後の学者にはこれを静態価格（statischer Preis）と呼んだ者もある。市場における売買当事者の経済的努力は、かかる静態価格を成立せしめなければやまないことは、あたかも引力が振子を垂直に静止せしめなければやまないのと同様である。垂直の位置から移された振子は、必ず垂直を回復しようとして振動する。費用に相当した高さから上下いずれかに外れた価格は、必ず費用

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

搾取理論の根拠

一

社会主義の何たるかを説明するにあたって、私は社会主義者の第一に要求するところは法律的形式的平等に対する経済的実質的平等であり、而してこの所謂平等の要求は、畢竟搾取廃止の要求に帰着するといった（拙著『近世社会思想史大要』）。学者の社会主義に対する定義は素より様々であるが、搾取の撤廃が社会主義者の最小の共通要求であるとすることは、ほぼ異論がないところであると思う。故に社会主義理論の根柢には、必ず何等かの搾取理論がなくてはならぬ。

そもそも搾取とは何ぞ。普通に解せらるるところでは、搾取とは労働せぬ者が、他人の労働の成果を収得することである。厳密にいえば、労働することはしても、その労働に比例せぬ多額の報酬を収めることも、その報酬が他人労働の成果を蚕食すると解せらるる限りにおいては、当然搾取であるべきである。この意味の搾取は、例えば領主が農民を強制して、その収穫の一半、三分の二または五分の二等を取る如き場合には、一見自明の事実である如く見える。

「アダムが耕し、エバが紡ぎし時
そもそも誰れが紳士なりしぞ。」

云々は搾取に対する抗議または愁訴の最も素朴なる形において表明せられたものである。しかしながら私有財産制度の下に職業的分業が行われ、分業者各個がその生産物または勤労を任意に相互に交換して、それぞれその欲望を充足

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

する交換経済においては、問題は爾かく簡単ではない。独立の手工業者とその顧客との関係についていえば、例えば靴工が靴を製造し、これを売却して得た代金をもってその生活必需品便宜品或いは時に贅沢品を購入する。彼れは果してこの場合、その与えたるところと等しきものを収めたか、それ以上を収めたか、或いはそれ以下を得るに止まったか。更に資本家とその賃銀労働者との関係についていえば、例えば紡績職工はその雇主のために糸を紡ぐという労働を給付し、その代りに一定額の貨幣賃銀か、或いは時には生活必需品の実物給与を受ける。製鉄職工にあっても造船職工にあっても、電車の車掌運転手にあっても、どの賃銀労働者にあっても皆な同様である。

これ等の場合に、これ等の労働者は果してその提供するところよりも多くを受けたか、少なくを受けたか、或いは正しくそれと同量のものを収めたか。与えるところと受くるところと相等しからずとすれば、前者は後者の幾倍もしくは幾分の一に相当するか。これ等の場合において与えられたものと収められたるものは同質でないから、直接に物そのものについて大小の比較しようがない。靴x足と綿糸y斤とそのいずれが大きいかを問うのは、全然無意義で、且つ不可能である。これ等異種異質のものを取って相互にその大小を比較するには、当然これを一の公分母に引き直さなければならぬ。而してそれは価値より外にはない。即ち搾取とは、少なくも交換経済の下においては、価値の搾取以外にはあり得ない。造り出されただけの価値が果してこれを造り出した者に帰するか、或いはそれに寄与せぬ他人の収得に帰すかということが問題となるのである。故に社会主義理論の根柢には、必ず何等かの搾取理論がなくてはならないが、搾取理論の根柢には、少なくも何等かの価値理論がなくてはならぬ。

この点において私はかつて自らこの問題について述べた意見を訂正しなければならぬ。私はかつてマルクスの労働価値説を批評するに関聯して、搾取を証明するためには価値論は必要ではないといい、ベルンシュタインを引いて、余剰労働は「……一個の経験的事実であって演繹的証明を必要とせざるものである。マルクスの価値論の当否は余剰労働の証明にはどうでも好いことである」と述べ、またツガン・バラノウスキーとともに「資本主義社会並びに歴史上それに先だつ社会組織内において労働搾取の事実の存在することを証明するためには、何等の価値学説に頼る必要がない」と説いた（拙著『価値論と社会主義』二二四―二二五頁）。しかし右に述べ来った理由によって、私は今は

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

この二者の説に同意することが出来ぬ。交換経済社会についての搾取理論の根柢には、何等かの価値論がなければならないことを今日は承認するものである。

二

大概の場合、搾取論の基礎となった価値理論は労働価値説である。一貨物の価値はその生産に費さるる労働量（或いは曰く、生産に必要なる労働量、或いは曰く、生産に投入せらるる労働量、或いは曰く、貨物に体現せらるる労働量）によって決せられる。従って資本家、地主の如き、少なくも社会主義者の目から見て労働に従事しない者が、その所得として或る価値額を収得するとすれば、それは労働者が造り出したる価値を搾取したものでなくてはならぬ、というのがその要旨である。而してここに所謂生産に費さるる労働量とは、ただに直接一物の生産上に費さるる労働量のみならず、間接に、該貨物の生産に充用せらるる生産手段（原料道具機械等）に費さるる労働量をも併せ含むことは当然である。この点についてはロードベルトスの公式を記憶して置くことが便利であろう。それによればx財は$m+\frac{n}{o}$量の労働の所産である。この場合mは直接貨物の生産に費さるる労働量、nは間接に生産手段の生産に費さるる労働量、而してoは生産手段が消耗せらるるまでに生産せらるるx財の数量である（Rodbertus, *Zur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände*, 1842, S. 12. その他）。

労働価値説は殊にリカードーによって発達した。リカードーは、決して価値は労働のみによって定まると説いた訳でなく、ただ任意に自由に生産し得る貨物にあっては、生産上に費さるる労働量がその交換価値を決定する主要要素だといったに過ぎないのであるが、しかし彼れ自身、或いは労働が価値の泉源（source）であると言ったり、或いはまた労働は価値の基礎（foundation）であるという言葉を用いたりしたことがあるから、価値は労働これを造るという解釈がそれから生じたのは必ずしも無理とは言われない。

然らば果して価値は労働によって造られると言い得るものであるか、否か。この問題に答えるに先だって、先ず価値は労働によって決定されるということが果して言い得るものであるか否かを吟味しなければならぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

搾取論

搾取とは何ぞ

搾取という言葉は今日常用語となり、誰れでも手軽にこれを遣う。しかし搾取とは果たして何を意味するかを厳密に吟味し、且つ推究すれば、そこに厄介な難問題の存すること、従って不用意にこの言葉を遣わない方が無事であることが認められるであろう。

企業家が市場に定まる賃銀をもって労働者を雇い、市場に定まる価格をもって生産物を売る。その場合、その生産物に対して或る程度以上の需要があり、それに応じた価格で生産物が売れると、この価格から生産費を差引いたあとに余剰として利潤が残る。搾取論を唱えるものは、この利潤は即ち搾取の結果に外ならぬというのである。別言すれば、利潤は「支払われざる労働」を示すということである。凡べて商品の価値はそれを生産するために必要な労働量、即ち労働費用によって定まるのであるから、労働しない企業家が利潤を収め得るのは、ただ労働者に対し、労働者がその労働によって造り出す価値よりも少ない価値の賃銀を支払うことによって、始めて可能となると謂うのである。即ち労働者の労働と、それに対する賃銀の支給とは不等価なる交換であり、労働者は与えるよりも少なく受ける。その差額が結局利潤を成すというのである。

労働貨幣の実験成績

搾取論は多くの社会主義者によって唱えられた。しかしどれも詮じ詰めて見れば、そのエッセンスは結局右に述べ

SAMPLE
Shoshi-shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

たところの如きものに帰着する。すべての搾取論は――少なくも自由経済に適用されるものとしては――その根柢において、生産物の価値は労働費用によって定まるという労働価値説が成立することなくしては成立しない。

価値は果して労働費用によって定まるか否か。この問題については、夙(はや)くから説明的と規範的と二つの労働価値説がしばしば並流し、或いは混流したことを注意しなければならぬ。説明的というのは、一物の他物と交換せらるる割合に現れるそれぞれの価値は、それぞれの生産に費さるる労働量によって定まる、という意味においての労働価値説である。規範的という方は、一物と他物との交換の割合はこれを二者それぞれに費さるる労働量によって定めることが正当である、それと違った交換の割合は不当である、という意味においての労働価値説である。

多くの社会主義理論家は往々にしてこの二つの意味の労働価値説を、同時に両つながら唱えた傾きがあるが、それはとにかく、規範的労働価値説を唱えるものは、当然その規範の実現ということを考える。そうしてその多くの者が申し合せたように到達するのは、労働貨幣の考案である。

細目は別とし、この考案の大様をいえば、生産に従事したものに、その労働した時間に応じて切符（労働貨幣）で支払いをする。他方各生産物の価格は、それに費された労働時間に応じて定められることにする。生産従事者はそれぞれ受け取った切符で、その所望の品々を購入する。その購入の価格は前記の如く、費用労働量によって定められているから、何人も多く労働して少なく酬いられ、少なく労働して多く酬いられるということがなく、各人は正しくその労働に応じて酬いられる。詳言すれば、例えば二十時間労働して、それに応ずる労働貨幣を受け取ったものは、必ず他の生産者が同じく二十時間を費して生産したもの一個（もしくは十時間を費して生産したもの二個、或いは五時間を費して生産したもの四個、或いは十時間を費して生産したもの一個と五時間を費して生産したもの二個と等々）を購入し得ることを保証されるというのである。

労働貨幣の提案は多くの人によって行われたが、その中の有名なものとしてドイツではロードベルトス、フランスではプルドン、イギリスではロバート・オーウェン等のそれがある。この中ロードベルトスのそれは机上の立案に終始した。プルドンは一八四九年、ともかくもその実行を企てたが、彼れの「人民銀行」は、プルドンその人が国事犯

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

で囚えられたため、未だ開業に至らずして閉鎖された。独りその考案を実行して、そうしてその考案に内在する困難を事実によって世に示したものは、ロバート・オーウェンである。このオーウェンの実験の始終は、労働価値説吟味の上に、側面から或る光線を投射するものと思う。

オーウェンの労働交換銀行（Labour Exchange Bank）は一八三二年九月三日、ロンドンに設立された。その仕組みをいうと、生産者はその売りたいと思う生産物を銀行に持って来る。反対に、消費者は銀行の貯蔵所からその欲するものを買って行く。それぞれの価格は、その費用に応じてこれを定め、それに相当する証明券を生産者に与えると、生産者は券面の数字に相当するだけの他の品物を銀行から買うことが出来るという訳である。例えば靴工があって、一足の靴を造るのに二シリングの原料と十時間の労働とを費したとすれば、十時間の労働に対して一時間券十枚と、二シリングの原料に対して（六ペンスを一時間に換算して）一時間券四枚、計十四枚が与えられるという風にする。靴工はその受取った時間券十四枚で、自分の欲するものが買えるはずなのである。

この銀行は始め四個月ばかりの間成功したように見えた。毎週六百パウンドの品物が銀行を通じて交換されたということである。ところが、間もなく困難が続発した。その困難の最大なるものは、銀行に生産物を持ち込んで、前記の評価法によって時間券を受け取っても、それで買いたいものが銀行にないということであった。欲しいと思うものは品切れで、無用物または流行後れの品物ばかりが銀行に残るようになったということである。それから注目を要するのは、価格は消費者の需要によって定められないで、費用によって定められるものだから、生産者がなるべく多く時間券を稼ぐことばかりを考えたということである。例えば一定の布地で二着のズボンを作るよりも、それで四着のチョッキを作った方が得だというので、そんなことも行われたとのことである。殊に原料品の供給が不足して来た。

銀行は窮して、加工労働に対しては時間券を交付するけれども、原料に対しては、これを優遇するため、普通の貸幣で支払いをするというような変則手段を取ることになった。こうなれば、銀行は既に理論的には破産したも同様である。実際に銀行は、開業後一年半余りの一八三四年五月に閉鎖の状態となった。

SAMPLE
Shoshinsuisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

労働価値説の根拠

これは小さな一事件に過ぎないが、理論的には極めて興味ある一例証をなすものである。それは結局銀行が諸生産物の労働費用と消費者の必要から来た尊重度との不一致によって倒れたことを示すものである。それは独り一小銀行のみならず、これを一社会全体に適用しても、同一の構想は必ず同一の失敗に終るであろうことを示すものである。凡べての生産物に、それぞれ生産上に費された労働量に応じた価格を定めたとする。需要者がその価格ではそれだけのものを欲しなければ、或る品物は売れずに残る。反対に、その価格でならば買いたいという需要者が供給者を超過すれば、需要者の間に争奪が起る。これをどうすれば好いか。

一つの途は、強権をもって売れずに剰る品物の生産を制限し、反対に不足して、買手の間に争奪が行われる品物の生産を拡張することである。それは即ち生産者を過剰品の生産から不足品の生産へ、強権的に移動せしめるということである。ということは、職業選択の自由を否認し、人を社会の必要とする生産への就業に強制するということである。

今一つの途は、価格を需要供給の状態のまにまに上下せしむることである。これを許せば、最初の価格では過剰となる品物の価格は下落し、不足する品物の価格は騰貴するであろう。価格の下落した品物を生産することは不利であるから、生産者の凡べてかまたは或る者はそこを去り、価格の騰貴した品物の生産へ移るであろう。かくして一方における生産の縮小、他方における生産の拡大が起り、延いて下落した価格の騰貴、騰貴した価格の下落が起るであろう。そうしてこの騰落は、諸生産物の価格と価格との割合が費用と費用との割合と一致するに至ってやむであろう。

しかし注意しなければならぬ。かく諸生産物がその生産費用に応じた価格をもって売買されるのは、単に各生産物がかくかくの費用をもって生産されるという事実（即ち術語でいう、生産の技術的係数）のみによって実現されるものではない。それは需要供給状態がかかる価格を成り立たせるようなものとなることによって実現されるのである。ただその場合、生産に要せらるる費用は、供給の調整者（regulator）として働くに過ぎぬ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

労働価値説が成立し得るとすれば、ただこの意味において成立する。それ以外にその成立を説明することは出来ない。

労働費用と需要

そこで、マルクスの説を問題にする。マルクスは商品の価値はそのものを生産するため社会的に必要なる労働量によって定まると謂った。ここに社会的に必要という意味は通常もしくは平均的に必要とされるというほどの意味だと解せられる。従って一物生産の技術が進歩すれば、その物の価値は低下するのである。

しかしかくいうことは、一物の一単位量を生産するために要せらるる（勿論社会的に必要なる）労働量が与えられれば、その物が他物に比して、いかに多量に、もしくはいかに少量に、生産せられても、一定単位量の労働の造り出す価値は常に同一であると説くものであるか。前に引いたオーウェンの労働交換銀行の経験は、そう説くことの不可能なるを示唆している。即ち諸生産物の価値を費用によって定めても、そのものが人に求められるか否か、即ち有用なるか否か、或いは有用の度如何によって、物は不足を来たしたり、売れ残ったりする。この場合それ等のものの生産に要せらるる費用さえ相等しければ、大いに有用なるものも、さして有用ならぬものも、皆等しき価値を有するものと見るべきであるか。ここに何人にも疑問が起る。マルクスは一応この疑問に答える。しかし一の疑問に答えることによって、次の疑問を喚び起こす。

商品の価値はそのものを生産するため社会的に必要なる労働量によって定まるという。但し商品は人の欲望を満たすもの、即ち有用なるものでなければならぬ。無用なるものの生産に投ぜられた労働は価値を生ぜぬと、彼れはハッキリ言明している。例えば資本論の一節にこういう。「……如何なる物も使用対象たることなくしては価値たることを得ない。物が無用であるとすれば、その内に含まれている労働もまた無用であって、かかる労働は労働とは認められず、随って何等の価値をも形成するものではない」（高畠訳文による）。

果して然らば、当然の順序として、同じく有用なる物の中でも、その有用の度の大小如何によって、等量の労働に

SAMPLE
Shoshinsuisai.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

過剰の労働者と過剰の商品

唯物弁証法は今日最も人を悩ましつつある問題の一である。多くの学者は今日この問題について何等かの発言をしなければならぬ義務を感じている如く見受けられる。この有様について、私は別の機会に左の如く言ったことがある。「マルクスは唯物弁証法によって資本主義の必然的崩壊及び共産主義の必然的到来を断定した。マルクスの断定の正しきや否やは別に論ずべき問題であるが、とにかくマルクスの歿後三十余年にしてロシヤに共産主義革命が起り、マルクシズムをその国教とするともいうべきソヴィエト共和国聯邦が出現した。この革命が東西文野の諸国に及ぼした影響は、百余年前フランス革命が欧洲諸国に与えたそれに比すべくして、その深刻は更に幾倍を加えるものであった。ただに欧米諸国のみではない。日本はもとより、トルコ、エジプト、ペルシャ、印度、支那、至る処においてマルクスの著作はその国の青年の、或いはその精神を養う食餌となり、或いはしばしばこれを酔わしめる酒ともなった。而して……マルクシズムの基礎は唯物弁証法にある。ここにおいて唯物弁証法は一時の流行語となって、真摯篤実なる学者も、軽佻にして新奇を喜ぶ者も皆なこれを口にし、哲学的素養なくして、しかも知らざるを知らずとすることを愧づる者は、争ってこれに雷同するようになった」云々。

私は決して哲学論としての唯物弁証法論を無用とするものではない。否な反対に、この問題については、私自身及ばずながら自分だけの見識を定めたいと、ひそかに心懸けているものである。しかし他面において、唯物弁証法なるものが今日幾多のマルクシストによって妄用濫用せられていることは争い難き事実であって、甚だしきに至っては、マルクスの立言に前後矛盾があるのは、資本主義社会そのものに矛盾があるためであって、これこそ真に唯物弁証法の極致を得たものだと公言する者をさえ出すに至っている。これと同時に、吾々に切実の利害関係ある、例えば資本

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

主義の崩壊は不可避の約束であるか否か、或いはその崩壊は何時、如何にして行われるかというが如き、現実的諸問題に対しては、唯物弁証法は、何等の実証的興味を感ぜしめぬ、稀薄な解答しか与えることが出来ぬ。ヘーゲルの弁証法なるものは、一切事物は皆な発展の過程上にあるものであって、宇宙間ものとして、固定不動なるはなく、而してこの発展は、矛盾の止揚、即ち正―反―合の階梯によって行われるとするものであるという。而して一切の発展は、ヘーゲルにあっては、絶対者たる理念もしくは理性の自発的発展から起るものであるという。今マルクスは、このヘーゲルの理念もしくは理性に替えるに物質をもってした。物質が実在であって、理念は人間頭脳中における物質の影像に外ならぬものとなった。これが即ち彼れが逆立ちしていたヘーゲル弁証法を正しく足で立たしめたと自ら称する所以であることは、既に度々説かれている通りである。

しかし一切のものは物的矛盾のために滅びて、より高きものによって代られるという命題は、この抽象的命題だけならば、人に何等格別の興味を感ぜしめぬであろう。資本主義の経済学的解剖を志す者にとって、人類社会は物的矛盾のために崩壊する、人類を載せている地球も物的矛盾のために崩壊する。地球の属する太陽系も物的矛盾のために崩壊する。而して人類社会の一形態たる資本主義社会もまた同様にして崩壊するというが如き命題ならば、もとよりこれを否定すべきではないかも知れないが、特にこれを肯定する興味をも感ぜしめぬであろう。吾々が知りたいのは、資本主義を崩壊せしめるという、その特定の具体的原因とその作用とである。資本主義社会は、果してそれに内在する「矛盾」のために倒壊するか否か。私は必ずしも深くそれを問わない。またかかる抽象的の設問ではこれを肯定することも否定することも、大して有意義でない。ただ一たび問題が経済的事実の域内に入り来って、例えば、資本の高度化は必ずプロレタリヤを失業せしむるか否か。プロレタリヤの政治的勢力は生産力の増進とともに増進すべしと考えらるるか否か。農工業上における大経営は中小経営を壊滅せしむるか否か。生産力の増進は必ず生産過剰の結果に導くか否か、等々の形で提起されれば、吾々は是非ともこれに答えなくてはならぬし、また崩壊の必然不必然は、この種の具体的問題に答えることによって始めてこれを論証し得るのである。

SAMPLE
Shoshi-shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

前述の如く私は、唯物弁証法を決して無用とは思わず、常にこの問題を充分考えたいと心懸けているものである。しかしながら、資本主義崩壊の必然不必然、共産主義実現の必然不必然を論ずるには、吾々は必ず具体的原因についてその作用を考察した上で結論を下さなければならぬ。けれども具体的原因についてその作用を考察する以上は、弁証法的用語は全く無用である。例えば、マルクスは『資本論』中に資本主義発展の究極を予想して、プロレタリヤの大衆が国家権力を掌握して、少数資本豪族からその手に集中せる資本を剥奪することの必至なるべきを説き、資本家的私有は自己の労働に基づく個人的私有の否定であり、その資本家の剥奪は「否定の否定」であるといっている。しかしこの場合の弁証法的用語は、資本主義崩壊の必然を論証するためには、単に一つの警句か、または装飾たる以上の用をなしてはおらぬ。或いはいうであろう。弁証法的用語を嫌っても、弁証法的思考たることを失うものではないと。無論その通りである。しかしマルクスを「剥奪者の被剥奪」の結論にまで到達せしめたその論究の諸階梯は、マルクスの哲学とは無関係に承認し、もしくは否認し得べきものである。生産力の発達は資本組成の高度化と相伴い、而してこのことは労働者の一部分を失業せしめて労働者を窮迫せしめ、且つその境遇を不安ならしめると、マルクスはいう。しかしこの理法を承認（もしくは否認）するためには、決して唯物弁証法を信奉しもしくは排斥することを要しない。またマルクスは大経営または大資本の優越を認めて、中小経営または中小資本は競争上の敗者となって消滅せんとする傾きがあるという。しかもこの理を承認するにも、同じく唯物弁証法による必要はない。生産力の発達とともに利潤率低減の傾向があるということについても同様である。労働者大衆の購買力欠乏のため生産物の販売が困難となるということについてもまた同様である。学者は事実の観察と推理に基づいて、或いはこれ等の理論を承認し、或いはこれを否認する。その承認否認は唯物弁証法により、もしくはよらざることとは無関係になし得るのである。しかもこれ等の理論の凡べてを是認すれば、当然マルクスの資本主義崩壊論の根拠を是認することとなる。しかもそれは弁証法の弁の字を知らずにもなし得るのである。また実際、資本組成高度化による労働者の失業、利潤率低減の傾向、生産力消費力不均衡による販路の梗塞等は、マルクス以前にリカードー、マルサス、シスモンヂ等全く弁証法を知らない者によって既に説かれて、マルクスに継承せられたものである。資本集中の傾向に着目せるものに至

SAMPLE
Shoshinisui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

私と社会主義

一　私とマルクシズム

社会主義の問題については私は二三十年来マルクス反対者と見られ、そういう者として批判を受けて来た。最近雑誌に続けて共産主義批判の文を書き、それを集めて一冊の小冊子を作ったので、また新たに批判を受けることになった。

私の本は、標題（共産主義批判の常識）にもある通り、共産主義について誰れもが一通り心得ているべき、ほんの常識程度のことを書いたに過ぎない。確信あるマルクシスト或いは共産主義者は、この程度のものを読んだところで、痛くも痒くも感じないだろう。それはよく分っている。ただ今日この程度の初歩的の知識の用意なしに共産主義を論じ、或いは時の風潮に動かされて共産主義に傾くものが、決してすくなくないと私は見た。そうしてそれはその人自身のためにもならぬことだと思ったから、主としてそういう若い人々を目標としてあの本を出した。あれを読んで、立ち止まって考え直す人が果たしてあったか。あれば最も仕合せである。あれを読んでいよいよ共産主義の確信を堅めたというものもあるか。それもやむを得ない。いずれにしても、専門家でない一般の世間が、まずあの程度のことを知り、然る後に去就を決するということであって欲しいと思った。私を批評するものの中には、私の本を読んだ若い人々から、あれに対する批判を求められたので書くという、断り書きをしたものがあった。もしもそれだけ私の本が人々に疑問を起こさせたのであったとすれば、著者としては目的の幾分を達したといえる訳である。私に対す

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

る批評は随分多かった。中には二三号に亙ってそれを連載した雑誌もある。これ等の評論に学ばなければならぬものが多いことは勿論であるが、ともかくも私の本が看過もしくは軽視されなかったのは、著者として満足していいことであると思う。

考えて見るのに、私はマルクスに対して決して冷淡ではない。過去も現在もそれに充分重きを置き、また多くの点において彼れに学ぶところがあったことを自分で認めているものである。ただ私のマルクシストと違うところは、マルクスを近世の大なる思想家の中の一人として見ること、またマルクスをインフォリブル（誤りなきもの）と信じないこと、他の思想家に対すると同じくマルクスに対しても、必要の場合に批判的であることである。ここでは過去を顧み、近世社会思想殊にマルクシズムを学んだ自分の経歴について、話をしたいと思う。

福田徳三

私は長く慶應義塾で社会思想史の講座を担当していた。社会思想史の講座というものは、多分慶應義塾が私のために設けてくれたのが日本で最初のものであったと思う。始めは社会問題という名称の下に、ハインリヒ・ヘルクナーの名著『労働者問題』の体例にならい、近世労働者問題全般に及ぶ講義をしていたが、段々その中の社会主義思想を取り扱う部分に興味が集まり、またかねて用意のノートもあったものだから、その方にばかり力を入れて、他がお留守になったので、名称を社会思想史と改めることを許してもらったのである。それが昭和の初めであったと思う。それからたしか昭和十八年まで続けた。昭和八年塾長就任後も、この講義は続けたが、戦争で多忙となり、殊に学生の答案を読む時間がなくなったので遂にやめた。今は平井新君が担任しているはずである。

長年の講義の間に、私は多くの社会主義者に興味を持った。ラッサール、ロードベルトスの国家社会主義に興味を持って、少し読んだことがある。十九世紀末における各国社会党運動の平俗化にあきたらずして起ったフランスの革命的サンヂカリズム、それの一派生物とも見られるイギリスのギルド社会主義、サンヂカリズムと親縁ある無政府主義等も、次ぎ次ぎに興味の対象となった。しかし、何時も中心にいるのはマルクスであった。ロードベルトス、ラッ

SAMPLE
Shoshinshirsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

サールを論ずるにも、サンヂカリズムや無政府主義を論ずるにも、やはり話はマルクスに帰って来る。事実十九世紀後半の社会主義思想を、マルクスを度外視して論じられないことは誰れがやっても変りはないだろうが、私は格別の関心をもってそれをした。それは青年の頃からマルクスに特殊の興味を抱いていたからである。

青年の私に、或いは吾々に、マルクスを吹き込んだのは――外でも書いたが――慶應義塾で経済原論を吾々に教えた福田徳三博士であった。それは今から四十年ほど前の明治四十年の頃で、福田博士のマルクス理解は、今思えば当時まだそれほど高級のものではなかったと回想されるが、ともかくも博士は、当時の日本で、原文で資本論を読んだといわれるごくごく少数の一人であり、世間一般の無知識に乗じて随分マルクスを振り廻したものである。堺利彦その他当時のマルクシストに対しても、幾らかマルクスを教えてやるという態度を見せた嫌いもあった。博士は或る時自分は熱中能力（Begeisterungsfähigkeit）においては人に負けないといったことがあり、事実アリストテレスからルヨ・ブレンタノまで、かなり多くの思想家学者に熱中したが、マルクスに対する情熱は久しく渝らなかった。

マルクスに対する態度を敵味方と分ければ、博士は結局反対陣営に属する人ではあったが、それでも終始マルクスのファンであった。ドイツの学者でも、ゾムバルトは当初からマルクスに対する批判を忘れず、しまいには激しいマルクス攻撃者となったけれども、始めは明らかにマルクスのファンとして出発した。『共産党宣言』については、彼れは「幾十年社会的事物の研究に没頭した者といえども、常に予期せざる未聞の新しい真理を共産党宣言中に発見する。予は既に幾百回これを読んだ。しかもなお再びこれを手にすれば、毎回新たにこれに惹き着けられる」といった事実がある。『経済と法』を書いてカント的論理をもって唯物史観を批評した法哲学者スタムレルも、やはりドイツ大学教授の中では最も夙くマルクスに惹き着けられ、その価値を認めた一人であった。省みれば私自身も幾分そうであったと言えるが、福田博士は一層そうであった。だから結局マルクス反対陣営の人でありながら、博士は必ずしもマルクスに対する反対批評を喜ばない風が見えた。博士とマルクスについて談論したことは度々ある。私がマルクスを批評するのに対して、博士は論理の上ではそれを認めながら、しかし何とか弁護できぬものかと感じたらしく、それを語気にも漏らすようなことがあった。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

福田博士によってマルクスを教えられ、博士とともにマルクスに牽引を感じながら、私の方が師よりもマルクスに対して冷静もしくは無遠慮であったといえるかも知れない。

堺利彦

とにかく私は右の通り、割合に夙(はや)くマルクスをかじっていた。だから、例えば初期の河上肇の社会主義的センチメンタリズムに対しては些かあきたらず、マルクシストの堺利彦が下したのと似たような批判を雑誌（中央公論）で加えたことがある。そんなものを見たのだろう。堺から人（改造記者秋田忠義君）を介して面会を求められたことがある。ところが堺は、事柄は忘れたが、（資本論共同翻訳事業の縺れだったかも知れない）当時何かの事で激しく福田徳三を攻撃していた。私は久しく堺の読者であり、マルクシストでありながら彼れの態度が余裕があって、ドグマチックでないのに好感を抱いていたが、しかし現に自分の旧師と喧嘩をしているその相手と新たに交際を始めるのは気が進まなかったから、ありのままの訳をいって断わった。堺からは、やはり同じ人をもって、「まことに気の付かないことをしました」と丁寧な挨拶があった。

この堺の求交は、別段私に同志になれというほどの意味ではなかったであろう。また堺と親しく交っても、私はマルクシストにはならなかったであろう。けれども、それによって色々変った見聞はしたかも知れない。とにかく私は三十匁々のその頃、大して著書や論文を発表していた訳ではなかったから、その無名人の書いた僅かばかりのものに注意してくれたのは、一人の知己というべきであったろう。

ついでに記すと、私はその後間もなく、偶然堺に会った。或る日用事があって、その頃愛宕町（であったか佐久間町であったか）にあった創刊後間もない「改造社」の仮住居を尋ねると、丁度そこへ原稿を届けて来た堺が入って来たので、互いに挨拶した。丁度いい機会だからと、社長の山本實彦君が二人を近所の帝国ホテルの午飯に案内してくれた。社を出て三人でブラブラ歩いて行くと、堺には尾行の刑事が後からついて来た。それはたしか大正八年のことであった。帝国ホテルは、ライトが設計した現在のものではなく、まだ山下町にあった古い木造の洋館であった。

SAMPLE
ShishinShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

堺は食卓でよく話をし、別れるときには「いいところで御目にかかりました」と丁寧な挨拶をした。いかにも世慣れた人という感じを受けた。無論私より十数年の年長者である。食卓での談話中、堺が福澤先生を褒めたのを覚えている。殊に『福翁自伝』の一節に、少年時代の先生が、稲荷の社に悪戯をして、社の扉を明けて、這入っていた石を捨て、代りの石を拾って入れて置いたら、やがて初午が来て、人々がお神酒を上げてその石を拝んでいるのを見て面白がった、とあるのが面白かった、といったのを、堺らしいと思ってきいた。当時は今と違い、福澤先生の著書については世間で何もいわない頃であったから、私はきいて愉快であった。

また、『共産党宣言』の翻訳の話も出た。幸徳傳次郎と堺との共訳は、始めて日露戦争当時発表されたもので、私も学生時代から読んでいた。それはたしか英訳本からの重訳で、今から顧みると訳語に不適当なもの——例えばブルジョワジーを紳士閥とするような——もあり、決して完璧とはいえないけれども、力の入った文章体の名訳で充分人を動かすものであった。一体共産党宣言が日本で始めて読まれたのは何時頃からであったのかと、それを堺にきいて見た。「吾々は翻訳するとき始めて読んだくらいのものです」と、至極アッサリした返事であった。

堺とはその後少しばかり文通し、著書も幾冊か贈られたことがある。堺も私もバーナード・ショーを愛読したところから、ショーの新刊作品について問合せを受けたりした記憶がある。しかしその後だんだん私のマルクス批判の立場もハッキリしてきたし、また二三のマルクシストと論争を始めたりしたので、自然疎遠になって行き、晩年にはまったく打ち絶えた。

堺のマルクシズムは啓蒙的な祖述の域を出でず、独自の批判も進展も示さずに終ったが、彼れの平明達意の文章によるマルクシズム解説は、かなりの影響があり、たしかに日本の思想史には記録さるべき人であったと思う。何よりも記憶すべきは堺の場合、またその直接の後進たる山川、荒畑諸君の場合、当時の日本でマルクシストとなることは今とちがい、冷遇と迫害とが待ち受ける以外、一身上には何の利益も期待されなかったことこれである。しかもその中にあって、堺の論調が常に余裕があって悲歌慷慨的でなく、また善玉悪玉的独断に陥っていなかったことを、私は快よく思っていた。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

外遊

ここで自分の西洋留学時代からのことを回顧して見る。

始めてロンドンに着いたのは一九一二年の秋で、私は二年前に慶應を卒業したばかりの二十五の青年であった。当時アスキスを首相、ロイド・ジョージを蔵相、チャーチルを内相とする自由党内閣は所謂人民予算を実行し、また急進的な社会政策、殊に強制的社会保険の実施に突進しつつあるときであった。ロンドンでは一般に自由党は人気がない。下宿の主婦は女中のために保険金納付のスタンプを貼ることについて不平をいう、一部の医者は、保険法による診療をボイコットするという騒ぎの最中であった。二十五歳の私が刺戟を受け、十九世紀以来の自由主義の変化、自由主義と社会主義の問題等について深く考えさせられたのは当然であったと思う。勿論私は留学以前から社会主義の問題には注意を惹かれ、前記の福田博士による啓発は別としても、ゾムバルトやディールの著書、進んではごく少しばかりの原典によって或る程度の知識と意見とを持っていたが、イギリスの社会的現実が私の上に更に力強い刺戟となったことは争われない。

ロンドンの、かのネルソン記念柱の立つトラファルガー・スクエヤーから北に上るチェアリングクロッス・ロードは、古本屋街であるが、その東側の中ほどに、社会主義、無政府主義、婦人参政主義等、に関する急進的書籍のみを取り扱うヘンダソンという書店があった。小さな店で、ストックも知れたものであったが、何しろ、大正元年のその当時、日本ではウッカリ持って出歩くことも出来ないような、禁制の書ばかり店一杯に並べてあるのには驚いた。たちまちその家の常得意となり、一理窟ありそうな主人及び温良な息子とも懇意になって、郊外の下宿からロンドンに出るたびにその店に立ち寄り、書棚に並べてあるものを――小冊子類が多かったが――片端から買った。イギリス人の常として、とかく大陸の文献には冷淡であり、独文、仏文のものはあまりなかったが、共産党宣言の英訳を初め、英文のものは、大抵ここで揃えることが出来た。

かく手当り次第に社会主義文書を渉猟(あさ)るとともに、系統的に近世社会主義思想及び実践運動の由来経過を明らかにし、これに対する批評的態度を定めたいとの欲求がようやく強くなって来た。そこで別段それについて学校で講義な

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com